**郷歌の末音添記「叱」「尸」「音」について考える**

**ー中期朝鮮語の音価を考える（その2）ー**

**2017.1.15**

目次

1. 「間のs」（語間字）について考える　　　　　 p2
2. 郷歌の「叱」と「尸」について考える　　　　　p3
3. 「叱」と「尸」の関係について　　　　　　　　p6
4. 未実現連体形語尾ㄹ/ㅭについて考える　　　　 p11
5. 声門閉鎖音（/ʔ/）について考える　　　　　　 p16
6. 郷歌の末音添記について考える　　　　　　　　p19
7. 郷歌の「掌音」について考える　　　　　　　　p23
8. 中古音と朝鮮漢字音の入声について考える　　　p26
9. 連書字ㅱについて考える　　　　　　　　　　　p30

備考１　郷歌26首の歌名対照表　　　　　　　　　　　 p35  
備考２　韻鏡字韻表　　　　　　　　　　　　　　　　　p36  
【注】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　p37

【引用書】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　p41

1. 「間のs」（語間字）について考える

今回は前回の更新につづいて中期朝鮮語の初声・終声についてさらにより深く考えていくことにします。初めに「「間のs」（sa・i・si・os）」（李基文　1975:133,140）、あるいは「語間字（사잇 소리）」（間音；金東昭　2003:165）とよばれるㅅ（通説はs）について考えます。

ㅅについては次のような記述がみられます（福井　2013：66）。

「中世語では，属格を表すのに-ɨi/ʌiまたは-sを用いる。前者は有情物について，後者は無情物と尊敬の対象になる有情物について用いられる（安秉禧1968/1992a）。現代語では-ɨiが主に用いられ，属格の-sにあたるものは主に複合語形成に際して表記上の痕跡として見られるが，発音の上では濃音化を表すのみである。（以下、省略）。」

ㅅ（属格）の表記は次のようにみられます。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| A | 表記 | ᄃᆞᇌᄣᅢ | （鶏の時→）の刻 |
| 翻字 | tʌrks pstai |
| B | 表記 | 孔子ㅣ魯ㅅ사ᄅᆞᆷ | 孔子ガノヒト |
| 翻字 | 孔子 i 魯 s sarʌm |
| C | 翻字 | 象ʌi香、mʌrʌi香、syoi香 | 象の香、馬の香、牛の香 |

＊A/B ：『訓民正音』（解例本）合字解（趙　2010：93,95）。傍点は省略。

＊C：『釈譜詳節』（十九－十七）（李基文　1975：175）。

＊「-ᄋᆡ/-의は時間名詞,場所名詞,特殊語幹交代名詞に限って処格にも用いられた。（改行）밤（夜）＋ᄋᆡ→바ᄆᆡ（以下、2例省略）」（姜　1993：146）。

ところで『訓民正音』（諺解本）には次のような記述がみられます（姜　1993：152）。

「56）君ㄷ字：（略）主に漢字語の場合に，前の字の終声が不清不濁字であったら，同じ系列の全清字を用いた。例えば，君군+ㄷ+字ᄍᆞᆼ（ㄴとㄷは同じ舌音）の如くである。（改行）  
57）虯뀨ᇢㅸ字ᄍᆞᆼ：ㅱ（不清不濁字）+ㅸ（同じ唇軽音の全清字）+ᄍᆞᆼ。ᄍᆞᆼのㅇは東国正韻式漢字音の終声。」

　上のような表記は『釋譜詳節』・『月印釋譜』・『龍飛御天歌』にも次のようにみられます。

|  |  |
| --- | --- |
| A | 王—k 姓-’ira　「王の姓である」　（釋譜9：19b） |
| 西天—t 字　　　「西天の字」　　　（月釋序23b） |
| 故—q 字　　　　「故の字」　　　　（月釋序24a） |
| B | 先考ʔptɨt　　　　先考の意　　　　『竜飛御天歌』 |

＊A：福井　2013：68。B：李基文　1975：133。

＊q：ʔ（声門摩擦音/ʔ/）。

上のk/t/ʔなどの無声子音は語間（子音）字とよばれ、属格の用法をもっているとみられます。また「特に『龍飛御天歌』が有名で,それらの文字の分布は音声的環境に支配されて」（福井　2013：66）いて、「sの前後に母音,鼻音,流音がくる場合,すなわち有声音間ではほとんど例外なく有声音zで表記されているのが特徴」（同書：同ページ）です。

たとえば『釋譜詳節』中のsori（「声」）が後続する場合を福井氏がまとめておられ、次のようになっています（同書：69－70）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 先行音節の末尾 | 母音（-V ） | 流音（r） | 鼻音（m） | 閉鎖音（k） | 閉鎖音（p） |
| 例 | sur’uis sori | mʌrs sori | pʌrʌms sori | 地獄ø sori | kaspupø sori |

＊s：属格。ø：語間字（属格表記）なし。ほかに「聖人（-n）s sori」、「龍（-ŋ）s sori」など。

このように『訓民正音』（諺解本）にみられる語間字のㄷ（t）やㅸ（β）などは属格の用法を持っているとみられますが、属格ㅅ（s）とはあまりにも音が違いすぎます。そこでこれらのㄷやㅸなどの語間字は属格ではなく、「〜という」「〜であるところの」といった属格もどきとみて***s***と表記することにします。

次節ではこの語間字***s***の謎を解くために郷歌（注１）の「叱」と「尸」について考えることにします。

1. 郷歌の「叱」と「尸」について考える

郷歌には属格ㅅ（s）と同じ用法をもつ「叱」がみられます。この「叱」については次のような記述がみられます（福井　2013：182）。

「由来は不明であるがsの音を表す。郷歌，吏読，口訣，固有名表記などに幅広く用いられる。この字の本来の字音（広韻 昌栗切，中世語cɨr）からはsを表すことが説明しがたい（略）（改行）文法的形態素としては，属格のsを表すのが代表的用法であるが，その他に自立語の語形の一部，特に,漢字音では表記できない音節末のsや，sk，st，spといった複子音に含まれるsを表すのにも使われる。（以下、省略）。」

郷歌にみられる「叱」の用例を次にみてみます（金完鎭　1980：179-80，127-8）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 歌名 | 語句 | 翻字 | 用法 | 訳 |
| A | 随喜功德歌 | 嫉妬叱心音 | 嫉妬-s-mʌzʌm | 属格（「の」） | 嫉妬の心 |
| B | 彗星歌 | 城叱肹良（C） | cas-s-hɨr-raŋ | 末音添記 | 城を |

＊金完鎭氏の轉字（ハングル）は翻字しました。  
＊A/Bの「叱」：それぞれ「持格促音辞」/末音添記（梁　1965：780/569）。小倉氏の解釈は金完鎭氏に同じ（小倉　昭和49：109，216）。  
＊C：「肹良」は「「をば」の意味に用ひられた」（小倉　昭和49：216）とされています。

上の「嫉妬叱心音」の「叱」は『訓民正音』（解例本）制字解の「孔子ㅣ魯ㅅ:사ᄅᆞᆷ（孔子ガノヒト）」（趙　2010：95）にみられるㅅと同じ属格とみられ、「叱」はㅅの先祖とみることができるでしょう。またBの「城叱肹良」に対して、小倉氏もcas+s（「叱」）+’ɨr（対格「を」）+nan（小倉　昭和49：215）と「叱」を末音添記とみられました。この末音添記というのは「郷歌にみえる「世・慕〜・夜・集〜」などで, 理・音・刀と同様,語形の示唆のために訓読字の下に子音が付加されるような表記」（李鍾徹　1991：46）をいいます。たしかに「城叱肹良」の「叱」を属格（「の」）とは解釈できず、語形の示唆のために添記されたとみるのが自然でしょう。そこで郷歌の「叱」は属格と末音添記の二つの用法をもっているとみることができるでしょう。

前節で属格もどきとみた語間字（ㄷなど）は現在属格ㅅ一つになっていることからそれらの表記の変化を次のように考えることができるでしょう。

末音添記の「叱」→属格もどきの語間字（ㄷなど）→属格（ㅅ）

次は郷歌の「尸」について考えることにします。郷歌には彗星歌の「道尸掃尸星利」や慕竹旨郎歌の「行乎尸道尸」など多くの「尸」がみられます（注2）。

これらの「尸」について小倉氏は次のように考えられました（例とともに小倉　昭和49：219,155）。

「は길、は目的格を表はす助詞（郷歌第七の（8）参照）（中略）。次なるはᄡᅳᆯなる語の末音ㄹを表はし（郷歌第八の（6）参照）連體形を形成したものである。（以下、省略）」

「（ㄹ音を表はすこと前に述べた通りである）は길 なる語の最後にあるㄹを繰返して書き表はしたものである。（以下、省略）」

　上の小倉氏の考えをまとめると、次のようになります。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 郷歌 | 翻字と用法（翻字は筆者） | 訳 |
| A | 道尸掃尸（星利〜） | kir-r（目的格）psɨr-r（未実現連体形） | 道を掃く（星を〜） |
| B | 行乎尸道尸 | nəi’o-r（未実現連体形）kir-r（末音添記） | 行く道は（「は」は補読） |

また「尸」（注3）について次のような記述がみられます（福井　2013：185,63）。

「由来は未詳である。（略）（改行）未実現連体形（中世語-rq、筆者注：rʔ）として使われるのが典型で」、「-rqのあとにくるものは,濃音化可能であれば必ず濃音になる（現代語でも同じ）。（略）また,疑問法語尾（-rqka/ko,-rqtaなど）に含まれる-rqも同じ形態素に由来するものであろう。ハングル創制以後, 『圓覺經諺解』（1465）以前の文献におけるこの語尾の表記は-rqが原則である。（以下、省略）」

ところで古代韓国語が記録されている『鶏林類事』（12世紀初）（注4）とともに中世初期の語彙を記録した最古の資料に『朝鮮館譯語』（15世紀初葉）があります。その『朝鮮館譯語』には語末のr/sのために「二」・「思」（注5）の表記がみられ、「-lをあらはすために特に獨立の一箇の漢字（筆者注：「二」）を使用」（小倉　昭和16年12月：85）しているのが特徴です。

例えば「二」・「思」の表記は次のようにみられます（小倉　昭和16年8月：47,66,67,76）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 『朝鮮館譯語』 | 4 | 67 | 69 | 122 |
| 表記 |  | （A） |  |  |
| 翻字 | piɔr | čas | kir | kɐ－żɐr |
| 発音 | [pjɔl] | [tʃat] | [kil] | [ka-ůl] |
| 訳 | 星 | 城 | 道 | 秋 |
| 『龍飛御天歌』 | 벼리 | 城 | 길히 | － |
| 『鶏林類事』 | － | 城主（졍자） | － | ᄀᆞᅀᆞᆯ |

＊『朝鮮館譯語』の翻字と発音は小倉氏による。Ů：uに黒小丸点の代用。

＊A：「雜思」（彰考館本・阿波本・稲葉本）。

＊『龍飛御天歌』：『龍歌故語箋』（前間　昭和49：108,73,73, -）より。  
＊『鶏林類事』：『雞林類事麗言攷』（上書：-,225,-,189）より。

このように『朝鮮館譯語』では「路」にたいして「吉二」の表記が、また郷歌の彗星歌では「道尸」がみられ、郷歌の「尸」と『朝鮮館譯語』の「二」は同じく末音rを表記したとみることができるでしょう。

1. 「叱」と「尸」の関係について

ここでは「叱」と「尸」との関係について考えることにします。そこで郷歌の兜率歌の「直等隠心音矣命叱使以惡只」（小倉訳は「直き心の命を使して」；小倉　昭和49：208）の「叱」の解釈を、次にみてみることにします（小倉　昭和49：208,金完鎭1980：119,梁　1965：535-6）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 心音矣命叱 | 訳 |
| 小倉 | mʌzʌm’ɨi 命을 | 心の命を |
| 金完鎭 | mʌzʌmʌi 命ㅅ | 心の命に |
| 梁 | mʌzʌm’ɨi 命ㅅ | 心の命を |

＊金完鎭氏の現代語訳は「ma’ɨm’ɨi 命’əi」（金完鎭　1980：123）。

＊梁氏は「命ㅅ」のㅅを持格ではあるが、目的格助詞（을）とみられています（梁　1965：536）。

前節の「嫉妬叱心音」と上の「心音矣命叱」を比較すればわかるように、「嫉妬叱」の「叱」は属格とみられますが、「命叱」の「叱」はそれに反して属格とみることは難しいでしょう。

次に彗星歌の「東尸汀叱」の各氏の解釈を次にみてみます（小倉　昭和49：216,金完鎭　1980：128,梁　1965：567）。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 東 | 尸 | 汀 | 叱 | 翻字/転写 | 各氏の訳 |
| 小倉 | 東 | s（促音符） | mɨrkʌz | s（持格）（A） | 東s mɨrkʌzs | 東方のなる |
| 金完鎭 | sʌir | r（末音添記） | mɨrskʌs | s（末音添記） | sʌir mɨrskʌs | 東쪽물가 |
| 梁 | sʌi | s（持格） | mɨrskʌz | s（末音添記） | sʌis mɨrskʌz | 東の水際 |

＊小倉氏の「東尸」の右ルビ：「東ㅅ」。左ルビ：「東方の」（ともに小倉　昭和49：215）。＊A：小倉氏は「「東尸汀叱」の四字は次句「城」の修飾句である。」（同書：ページ）と「叱」を持格（属格）に解されています。

＊『雞林類事』（12世紀初め）では「東：도ᇰ（宋音に同じ）」（前間　昭和49：191）とすでに漢語が借用されています。

金完鎭氏は「東尸」の「東」をᄉᆡᆯ（sʌir）、「尸」を末音添記とみて、「東尸汀叱」の現代語訳を「東쪽 물가」（東方水際）とされています。しかし梁氏は處容歌の「東京明期月良」の考察の中で、「東京」の古訓が「ᄉᆡᄫᆞᆯ」（梁　1965：385）であることなどから「東尸」の「東」をᄉᆡ（sʌi）とされました。そしてこの「尸」を持格とみて、「東尸汀叱」をsʌismɨrskʌz（「東の水際」）と解釈されました。また小倉氏は上の注にあるように「東尸」を「東ㅅ」（＝東叱）とみて、「東方の」と解されました。この「尸」を属格の「叱」とみるのは文法的には問題ですが、小倉・梁両氏のように「東尸汀叱」を「東方の水際（なる）」と解するのが良いのもまた事実でしょう。そこで梁氏はこのような「叱」と用法を持つとみられる「東尸汀叱」の「尸」は他の郷歌中には見られないとして、「詞脳歌中の唯一例」（梁　1965：567）と考えられました。またこのような「尸」を「叱」とみる梁氏に大きな影響を与えたとみられる小倉氏は、それ以上に「尸」を促音符のs（日本語の促音のようなもの）（注6）とみられました。そこで疑問が起こるのですが、「東尸」が「東叱」と解釈できるのに文法的には属格でない「尸」を用い、「東尸」のように表記された理由は何でしょうか。この疑問を解く鍵が禱千手観音歌の「二尸掌音」にみられます。

そこで「二尸掌音」（「二つの掌」）の各氏の解釈を、次にみてみることにします（小倉　昭和49：193,金完鎭　1980：97,梁　1965：459－60）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 二 | 尸 | 掌 | 音（語末はm） | 翻字 |
| 小倉 | tu | s（促音符） | sonpataŋ | mをŋとみる | tus sonpataŋ(’ʌrを補読) |
| 金完鎭 | tuβɨr | r（末音添記） | sonpʌrʌm | ’ɨm | tuβɨr sonpʌrʌm（A） |
| 梁 | tur | r（末音添記） | sonspataŋ（B） | ŋ（末音添記） | tur sonspataŋ |

＊「二尸」の右ルビ：「두ㅅ」。左ルビ：「二つの」（ともに小倉　昭和49：192）。

＊A：現代語訳は「두 손바닥」（「二つの掌」；金完鎭　1980：107）。

＊B：「「掌」の原訓は「sonspatak」」（梁　1965：460）。

＊「二曰途孛（改行）두ᄫᅳᆯ　今둘といふ語は鮮初では（原注一）둘とも（原注二）두을ともいつてゐる。（略）「二の」といふとき鮮初に（原注三）두といつた。」（前間　昭和49：178）。

小倉氏は上の「二尸」にたいして、「は둘と讀み、ㄹを表はす（郷歌第八の（6）参照）と合して둘と讀むやうにも思はれるが、此處では두と讀み、「尸」は次の語に移るときに起る促音現象を表はしたものと見る。」（小倉　昭和49：193）とわざわざtusと翻字されています。たしかに「二尸」の「尸」を末音添記とみて、tuβɨr-rと解釈できそうです。しかしそうみると前間氏の上の記述にあるように「二尸掌音」は「二つ・掌」（tuβɨr・末音添記・sonpataŋ）であって、「二つの・掌」と解釈するには難があります。そこで小倉氏は「尸」を属格のような促音符sとみて「二尸掌音」を「二つの・掌」（tu・促音符・sonpataŋ）と解釈されました。「二尸掌音」をtuβɨr （二つ）・s（属格）・sonpataŋとみるか、tu（二つの）・s（促音符）・sonpataŋとみるかは小倉氏の促音符sとみる考え方から派生した問題ですが、「二尸」（tuβɨr-末音添記）と「二叱」（tuβɨr-属格/tu-促音符）を比較すれば「尸」と「叱」の同質性をみることができるでしょう。ところで祭亡妹歌には末音添記の「叱」や「尸」とも解釈しにくい「辭叱都」がみられます。

そこで「辭叱都」（「言葉も」）の各氏の解釈を次にみてみます（小倉　昭和49：211,金完鎭　1980：124,梁　1965：547）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 辞 | 叱 | 都 | 翻字 | 訳 |
| 小倉 | mar | s（促音符） | to | marsto | 言葉も |
| 金完鎭 | mar | s（末音添記） | to |
| 梁 | mar | s（持格促音）（注7） | to |

＊「辞」：小倉氏は「辝」。梁氏は「辝（辭）」。金完鎭氏は「辭」、現代語訳は「말도」（「言葉も」；金完鎭　1980：127）。

金完鎭・梁氏は말ㅅ도、また小倉氏は「は말ᄉᆞᆷ又は말（言葉）、は促音を表はすに用ひられる文字（郷歌第五　の（6）参照）、は도（も）である。」（小倉　昭和49：211）と解釈され、各氏とも「叱」をsとみられていることに違いはありません。しかし「辞叱都」を「言葉・の・も」と文法的に解釈することはできないことからこの「叱」は属格のsとみることはできないでしょう。また当時の人々にとっては「辞都」（mar-to）で充分意が通じたと思われますが、わざわざ「叱」が添記されています。そこでこの「叱」は「語形の示唆のために」（李鍾徹　1991：46）添記されたのではないかと考えられます。しかし語形を指し示すために添記するのであれば「辞叱都」（mar-s-to）ではなく、「辞尸都」（mar-r-to）のように「尸」が添記されたのではないでしょうか。そこでこの「辞叱都」の「叱」は属格のsでもなく末音添記でもないと考えられます。このように考えると「辞都」にわざわざ「叱」が添記された理由は何か、無添記の「辞都」と「叱」が添記された「辞叱都」との違いは何かという疑問がでてくるでしょう。先に小倉氏が「東尸汀叱」や「二尸掌音」の「尸」に「叱」と同じようなもの（促音符：促音のようなもの）をみられたことを述べました。そこで「辞叱都」の「叱」は属格でもなく末音添記でもない促音符の「叱」（属格sもどきの***s***）とみれば、「尸」と「叱」の同質性から「辞尸都」→「辞叱都」のような変化を考えることができるでしょう。ここで末音添記された「尸」をrもどきとみて***r***と表記します。そして「辞叱都」（mar-***s***-to）の先祖を「辞尸都」（mar-***r***-to）とみれば、「辞」（mar）の語形を指し示すために「辞」の語末に「尸」（***r***）が添記されたとみることが可能になるでしょう。先に「二尸掌音」の「尸」をs（小倉氏の促音符）とみるか、r（金完鎭氏の末音添記）とみるかは文法的にみれば大きな違いがあります。しかし「尸」の後裔を「叱」とみれば（***r***→***s***の変化を考えれば）（注8）語形を指し示すために「辞都」に「叱」が添記されたとみることが可能になり、小倉氏の促音符sと金完鎭氏の末音添記の溝をうめることができるでしょう。

　ところで「有」については、次のような考えがみられます(金思燁　昭和56：215－6)。

「「有」の義の朝鮮語は、中世語においては、一様に「이시」（i-si）である。

曰（i-sil）（鶏林類事）（2例省略）（改行）

郷歌の用例（改行）（2例省略）

多……故（①・②다・is-ta……고・i-sil-ko,有り……有らむや）（彗星歌）（略）（改行）

つぎの例からして、「叱」は「ㄷ・ㄹ」(t・l)の表音字であり、したがって新羅時代の「有」の語は「일・읻」(il・it)であるべきである。

有――（it）→（il）→잇（is）

「叱」の字は末音ㅅ（s）に該当するが、祭亡妹歌の「叱都」（도・mal-to）（2例省略）など「ㄹ」（l）音もある。（洪起文・郷歌研究・八三頁）

鶏林類事

花曰　곶（kol-koč）猪曰　돋（tol-tot）。（以下、中略）

（句を改め）

以上の論証により「有」の訓「이시・잇」（i-si,is）は中世語であり、新羅時代は「이리・일」「읻」（i-li,il→it）であったものと思われる。（以下、省略）」  
　＊筆者注：下線は小丸点（〇）の代用。

またrとsの交替については次のような記述がみられます（上書：177）。

「古代語から中世語にかけて、sとrとが交替する例がある。

（a）―ᄒᆞᆯ〜―ᄒᆞᆺ（hʌｒ〜hʌｓ・目的格助詞）

（b）ᄀᆞᄌᆞ런〜ᄀᆞᄌᆞᇫ（kʌ-čʌ-rən〜kʌ-čʌz・揃う）（以下、古地名表記の例は省略）」

このようなrとsの同質性は、次の『三國史記』（注9）の古地名中にもみられます（小倉　昭和49：193）。

「「尸」の促音記號として用ひられた例は郷歌中には存しないが、「三國史記」古地名中に

新良縣本百濟沙良縣（（「新」は「沙」に通ず））。  
野城郡本高句麗也忽郡（（「野」は「也」に、「城」は「忽」に當る））。

大山郡本百濟大山郡。  
帯山縣本大山（「帯」は「大」に當る）。

などあり、又「三國遺事」嘉瑟岬の分註に「或作又、皆方言也、岬俗云、故或云云々。」（「古尸」は「岬」の訓곳を表はしたもの）とあるのを見ても「尸」が促音に用ひられたことを知るに足る。」

そこで上引中の「岬（곳）俗云古尸」を考慮し、上の「大尸山郡」の「尸」を属格の「叱」とみると「大尸山郡」→「大叱山郡」→「大山郡」の変化、つまり「尸」（***r***）→「叱」（***s***）→Ø（***s***消失）の変化を考えることができるでしょう。また日本語で驚いたときに発する音「アッ」（ [aʔ]）の表記に使用される促音字「ッ」は [ʔ]（ʔ：声門閉鎖音）の発音を表わしている（注10）ことから、「叱」（促音符s）と「尸」（***r***ʔ）との音の近さを考えることが可能でしょう。このように考えてくると、小倉氏の「「」は促音を表はすに用ひられる文字」（小倉　昭和49：211）というアイディアは先見的な重要なアイディアだったといえるでしょう。そして前節で「叱」の変化を「叱」（末音添記）→語間字（ㄷなど：属格もどき）→ㅅ（属格s）と考えたので、「尸」と「叱」の同質性を勘案すると、末音添記の「尸」「叱」から現在の濃音への変化を次のように考えることができるでしょう。

「尸」（***r***ʔ）→「叱」（***s***ʔ）→語間字（***s***）→ㅅ（s：属格）→Ø（消失：濃音）

＊***r***/***s***：それぞれr/sもどき。  
＊***r***ʔ→***s***の変化を考えるよりは***s***にも声門閉鎖音が存在したとみて、***r***ʔ→***s***ʔのような変化を考えるほうが理に適っているでしょう（注10）。

上の考えを図式化すると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | rもどき/sもどき | | 属格もどき | 属格 | 濃音 |
| 表記 | 尸----→ | 叱-------→ | 語間字----→ | ㅅ----→ | 合用・各自並書 |
| 例 | 東尸,二尸,辭叱都,城叱 | | 君ㄷ字 | 魯ㅅ사ᄅᆞᆷ | 싸ᄅᆞ미 |
| 発音 | ***r***ʔ--------→***s***ʔ--------------------------→sʔ-----------→ʔ | | | | |

＊濃音は古代以来、声門閉鎖音（ʔ）として存在していたと考えてあります（次節参照）。

1. 未実現連体形語尾ㄹ/ㅭについて考える

この節では未実現連体形語尾ㄹ/ㅭ（r/rʔ：福井氏のr/rq）について考えることにします。

音節末にみられるㅭ（rʔ）について『東國正韻』（序）に当時の朝鮮漢字入声音（俗音）を正すためとして、「質・勿のような入声の韻は影母（ㆆ）をもって来母を（ㄹ）を補う」（趙　2010：182）との記述があります。しかしこの「‘ㅭ（rq）’という音連続は東国正韻の韻尾としてだけ用いられたのではなく,固有語においても,未実現連体形の表記として頻繁にも用いられ」（福井　2013：81）ました。

この未実現連体形語尾は『月印釋譜』（1459年刊）ではㅭ（rʔ）、また『法華經諺解』（1463年）ではㄹ（r）と、次のような違いがみられます（同書：81）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| a | 佛道 | 求ᄒᆞᇙ | 사ᄅᆞ미 | 月釋18：60a |
| ppurʔttow | kkuw-hʌ-rʔ | sarʌm-i | 「仏道を求める人が・・・」 |
| b | 佛道 | 求ᄒᆞᆯ | 싸ᄅᆞ미 | 法華1:242a |
| ppurʔttow | kkuw-hʌ-r | ssarʌm-i | （同上） |

　＊福井氏のqは ʔに、ㅭはrʔに変えてあります。以下、同様。

上の「（a）は『釋譜詳節』・『月印釋譜』など比較的早い時期の文献に多く，(b)は『楞巖經諺解』・『法華經諺解』など1461年以降の刊經都監刊行の仏書諺解に多く見られるという違い」（上書：64）がみられ、「ハングル創制以後，『圓覺經諺解』（1465）以前の文献におけるこの語尾（筆者注：未実現連体形語尾）の表記は-rqが原則で」（同書：64）した。

このa・bの違いは福井氏の記述（上書：63）を表にまとめると次のようになります。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| a | ㅭ+C（-rʔ+C-） | -rʔ k- | -rʔ t- | -rʔ p- | -rʔ s- | -rʔ c- |
| b | ㄹ+CC（-r+CC-） | -r kk- | -r tt- | -r pp-（原注7） | -r ss- | -r cc- |

＊C：子音（k,t,p,s,c）。CC：各自並書（kk,tt,pp,ss,cc）。ㅭ（rʔ）/ㄹ（r）：未実現連体形語尾。なお原注7は省略。

そこで上の「qk=kk,qt=tt,…などの等式は，「各自並書」が音声学的には単なる重子音ではなく，何らかの喉頭の働きが加わっていたことを示している。とすれば，これらの発音は音声学的には今日の濃音とほとんどかわらないものだったと考えられ」（同書:74）ています。先のaとbの表記の違いは『月印釋譜』はrʔ‖C、その後の『法華經諺解』はr‖ʔCのように音節境界（‖）が移動し、濃音が発生したためaからbへ表記がかわったと考えることができるでしょう。

そこで上の表記の変化は次のように考えることができます。

ㅭ‖C（単書表記）→ㄹ‖CC（各自並書表記）

　　＊ㅭ：rʔ。ㄹ：r。C：単子音。CC：濃音（ʔC）。‖：音節境界。

　上の各自並書表記（CC）は「世祖の時代の『圓覺經（諺解）』の後から16世紀末まで使われなくなった。しかし15世紀末から‘ㅆ’は再び使われ始め、（略）16世紀には広く使われ、17世紀になると‘ㅃ，ㅉ，ㄸ’が再び現れ、近代韓国語時代である18世紀には‘ㄲ’も使われ、合用並書文字（ㅺ，ㅲ等）と共に使われつつ20世紀に入る」（金東昭　2003：165）と変遷しています。たとえば『捷解新語』（1676刊）では、「中世語においては-rkka,-rqkaなどと表記されていた疑問法語尾が-ㄹᄭᅡ（-rska）と表記される例が見られる。これは,各自並書か声門閉鎖音qで書かれていた濃音の表記を,そのかわりにsでもできるようになったことを表すものであり,この時期にはs＋阻害音が明瞭に濃音化していたことを示」（福井　2013：194）しているとみられています。

ところで濃音を表記したとみられる合用並書sC（C：閉鎖音など）が15世紀以後、次のようにみられます（金東昭　2003：173）。

「그ᅀᅳ->ᄭᅳᅀᅳ-（牽）/딯->ᄯᅵᇂ-（擣）/사호->싸호-（闘）,原注57）」。

＊「뒤>ᄯᅱ/ᄠᅱ（茅）」（上書：173）のようなㅳ表記も存在します。

上のような表記の変化をs添加と名づけると、s添加は中世頃よりみられることからs-系複子音（sC）について金東昭氏の次のような考えがみられます（上書：114）。

「‘ㅅ’が[s]音を帯びていたとするならば、‘그ᅀᅳ->ᄭᅳᅀᅳ-，딯->ᄯᅵᇂ-’の変化を‘kɨzɨ->skɨzɨ-，tih->stih-’のように語頭に[s]音が添加される変化と見なければならないのだが、このような音韻変化はある筈がないので、この変化は濃音化現象と考えざるを得ないのである。（以下、省略）」

金東昭氏が懸念をだされているように表記上のs添加を直截にs音の添加と考えると、無からs音が発生したことになり自然の法則に反します。そこでこの矛盾を解決するために、s添加された表記上のskの発音はskではなく濃音（ʔk）であるという考えがだされたとみられます。しかしこのようにs添加されたskを複子音skでなく濃音（ʔk）と考えたとしても同じように声門閉鎖音（ʔ）が無から生まれた（あるいはsからʔに変化した）ことになり、その矛盾は解決されないでしょう。このような表記上のs添加（C→sC）を無から声門閉鎖音（ʔ：濃音）が発生したと説明するのではなく、上に述べたような矛盾をおこさない新たな考えが必要となるでしょう。そこでkɨzɨ→skɨzɨ（「牽く」）の表記上の変化を声門閉鎖音（ʔ）の発生や再生とみる考えは破棄し、kɨzɨそのものに声門閉鎖音が内在していたと考えます。つまり表記の上ではkɨzɨk→skɨzɨ のようなs添加がみられてもkɨzɨとskɨzɨの発音には違いがなく、古代以来同じ ʔkɨzɨであったと考えます。このような考えはにわかには信じがたいのですが、もともと声門閉鎖音（ ʔ）が存在していたと考えれば、表記上のs添加と発音のあいだの齟齬はなくなるでしょう。しかし上のs添加と発音の矛盾を解消するアイディアにも問題は残ります。たとえば疑問法語尾に声門閉鎖音（ ʔ）が古代以来存在したと考えると、『圓覺經諺解』以後のkaから『捷解新語』のkkaへの表記の変化は何かという疑問がでてくるでしょう。そこで新たにでてきたこの問題を次に考えることにします。

疑問法語尾は郷歌の願往生歌に「成遣賜去」の「去」（ka）がみられ（金思燁　昭和56：284）、「中世語においては-rkka,-rqkaなどと表記されていた」（福井　2013:194）のですが、『捷解新語』（1676）ではkka（京都大學國語學國文學研究室編　昭和47：20）の表記がみられます。また「ハングル創制以後、『圓覺經諺解』（1465）以前の文献におけるこの語尾の表記は-rq（筆者注：-rʔ）が原則」（福井　2013:63）であり、『圓覺經諺解』以後、「各自並書とq（筆者注：声門閉鎖音/ʔ/）の廃止」（福井　2013:65）がなされています。そこで郷歌にみられる疑問法語尾の「去」から現代への変化をka（「去」）/ʔka→ka→kka（濃音；ʔka）のように考えることができるでしょう。しかし中世に存在していた声門閉鎖音（ʔ）が消失し、その後に再生（通説では発生）するという変化は自然とはみられません。そこで古代の「去」には声門閉鎖音（ ʔ）があったと考え、「去」（中世ㅭ‖가/ㄹ‖까）と『捷解新語』の까表記の違いは濃音の特徴である声門閉鎖音（ ʔ）以外の何か（αとします）によるものと考えてみます。そう考えれば「去」は声門閉鎖音とそれ以外のαの特徴を、『捷解新語』のkkaは濃音（ʔka）の特徴を表記したとみることができ、古代の「去」から『捷解新語』のkkaへの変化をʔka＋α→ʔka（αの消失）として説明できるでしょう。そこでこの考えのもとに『訓民正音』（解例本）の記述をみなおすことにします。前回の更新では同じ単子音を横に並べて書く各自並書表記について考察しました。この各自並書表記は『訓民正音』（解例本）の制字解において「ㄲ、ㄸ、ㅃ、ㅉ、ㅆ、ㆅは全濁である」（趙　2010:35）と規定されています。

上の制字解で規定された各自並書（CC）と現代の濃音（ʔC）の関係について次のような考えがあります（趙　2010：38）。

「（上略）朝鮮語の全濁音は、を指している。現代朝鮮語の濃音は[p’]や[t’]など、声門の緊張を伴った子音である。この時代（十五世紀）の濃音も、それに類する音であっただろうと思われる。」

前にみたように『月印釋譜』（1459年刊）の「求ᄒᆞᇙ사ᄅᆞ미」（kkuw-hʌ-rʔ‖sarʌm-i）の表記は『法華経』（1463年）では「求ᄒᆞᆯ싸ᄅᆞ미」（kkuw-hʌ-r‖ssarʌm-i）となっています。また『訓民正音』（解例本）の制字解では「全清の字母を並べて書いて全濁とするのは、全清の音声が凝固して全濁となるからである（以下、ㆅの全濁については省略）」（上書：40）と記述されているので、『法華経』のssarʌm-iのssには「凝る」の特徴があったと考えることができます。そこで濃音の特徴である声門閉鎖音（ʔ）は古代以来存在したと考えると、『法華経』のssarʌm-iは「凝る」の特徴をもつ濃音であったとみることができるでしょう。そして『円覚経』以後、「各自並書とqの廃止」（福井　2013:65）がなされているので、その「凝る」の特徴がなくなったことで平書表記（C-）があらわれたとみることができるでしょう。また15世紀以後には濃音とみられるska表記（＝ʔka）が現われるので、『円覚経』以後の平書表記（C-）からskaあるいは各自並書表記（kkなどのCC-）への変化は「凝る」の特徴がなくなり濃音の特徴が現われた（通説の「濃音の発生」）ためであると説明できるでしょう。

説明がややこしくなったので、ここまでの考えを疑問法語尾kaでみてみると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 郷歌 | 中世 | 『円覚経』以後 | 『捷解新語』 |
| 表記 | 「去」 | ㅭ‖가/ㄹ‖까 | ㄹ‖가 | Ø‖까 |
| 翻字 | （ʔka） | rʔ‖ka/ r‖ʔka | r‖ka | kka |
| 発音 | ʔka---------------------------------------→ʔka | | | |
| 特徴 | 凝る------------------------------→***s***-----→濃音 | | | |

＊Ø：消失。***r***,***s***：それぞれr,sもどき（下記注、次節参照）。‖：音節境界。

＊「先行する形態素の末音r,yの後で、後の形態素の頭音kは’に変わった。ar-（知る）、tʌ・oi-（なる）に-koが連結すればar・’o,tʌ・oi・’o となった。」（李基文　1975：155）という観察があるので、ʔko→’oの変化はarʔ‖ko→ar‖ʔko→ar‖’oと考えられるでしょう。そこでㅭ‖가→ㄹ‖까→ㄹ‖가→까の変化は***r***ʔ‖ka→***r***‖ʔka→Ø ‖ʔka（＝kka）とみるのがよいでしょう。第８節の‘ゆるやかな声立て’の変化（ʔ→’）を参照ください。

＊『円覚経』：「『圓覺經諺解』。疑問法語尾は「『圓覺經諺解』以後の文献では，-rka/-rko,-rtaと表記されるようになる」（福井　2013：65）。

＊『捷解新語』の疑問法語尾：「さてはそうて御さる加。」の「加」（疑問助詞）の右ルビは까（kka）（京都大學國語學國文學研究室編　昭和47：20）。

＊合用並書表記の例：「뒤>ᄯᅱ/ᄠᅱ（茅）」（金東昭　2003：173）。

では上の「凝る」→s→濃音の変化とはどのようなものだったのでしょうか。声門閉鎖音（ ʔ：濃音）は古代から現代まで連綿と存在し続けてきたと考えました。そうすると古代の「凝る」は表にあらわれない濃音の特徴をもっていて、近代以降その濃音の特徴が表にでてきて、合用・各自並書表記されるようになったと考えることができます。そこで濃音の特徴をもっていたのにその特徴が古代の表記にあらわれなかったという矛盾をうまく説明するために、古代の「凝る」は濃音の特徴とまた別のある不明のαの特徴の二つをもっていたと考えてみます。

以下、筆者のアイディアをわかりやすく説明するために、下図のような直方体のたとえを使ってみます。

　　　　　　　　濃音（後部）

α（前部）

　（正面）　↗　　↖（側面）

　　古代（凝る）　　　現代（濃音）

上の直方体を正面から見ることは古代朝鮮語の観察、また側面から見ることは現代朝鮮語の観察と考えます。そして正面から見えたものが古代の「凝る」であり、側面から見えるものがαの特徴が消えてしまった濃音であると考えます。つまり古代にはαの特徴が濃音の特徴よりも前面にあったために奥にある濃音の特徴が（正面からみていた）古代人には見えず、時代が進み中世頃より前面にあったαの特徴が消失し、古代からずっと存在していた奥にあった濃音の特徴が（側面からみる）現代人には見えてきたと考えてみます。このように考えると古代から現代までの「凝る」→s→濃音の変化を説明できると思われます。ではαの特徴と濃音の特徴を持つ古代の「凝る」とはどんなものだったのでしょうか。

この問題を考えるために、次節では声門閉鎖音（ʔ）について考えることにします。

1. 声門閉鎖音（/ʔ/）について考える

声門閉鎖音（ʔ）の表記には次のようにㆆが使用されています（注11）（李基文　1975:133）。

「初声中でただㆆ（ʔ）だけが『訓民正音解例』用字例から除外され（一部略）、『東国正韻』の漢字音表記のために設けられたからであった。漢字音以外の表記にこの文字が使用された例は、世宗・世祖代文献において次の二つの場合に限られている。まず動名詞語尾の表記に見ることができる。horʔ kəs(すべきこと)、kənnəsirʔ cəi(渡られる時)。しかしこれらはまたhor kəs,kənnəsir cəiのように表記されもした。そして次の二書では「間のs」（sa΋i΋si΋os）の代りに使われた。『竜飛御天歌』　先考ʔptɨt（先考の意）、『訓民正音諺解』　快ʔ字（快という字）、那ʔ字（那という字）等。」

このようにㆆ（ʔ）は中期朝鮮語では漢字音表記を除けば、未実現連体形語尾や語間字（「間のs」）のような特殊な表記にみられました。

ところで現代の濃音の特徴は次のようにみられています（それぞれ福井　2013：23,小倉　昭和50：174）。

「「韓国語の特徴である濃音を発音するときに口腔の閉鎖の解放に先立って声門の閉鎖が観察でき，ゆえに濃音を[ʔk, ʔt, ʔp」と音声表記することが可能である（以下、略）」

「（4）（筆者注：ta）はtよりaspirateに類する「わたり」を經て母音に接續するが、（1）（筆者注：tta）はttより直ちに母音に、或はttより母音に近い有聲の「わたり」を經て、aなる母音に接續すると言へる。後者の場合にありては母音がttの破裂を待ち構へて居るが如き狀態にある故に、其のttはやゝもすれば次の母音に影響せられて有聲音に聞きなされることすらある。或人はtoin-siotを以て濁音なりとし、或は淸音と濁音との中間音であるなど言つて居るのは、素人の言ひ方ではあるが、確かに事實を物語つて居る。」

＊上の引用中のtoin-siotは濃音の意。

＊toin-soriは「硬音。濃音。」/toin-siosは「①‘‘ㅆ’’の名称。②他の子音に並書される‘‘ㅅ’’の名称」（ともに天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55改訂版：164）。

　ところで上の濃音の特徴は奄美喜界島方言にみられる喉頭化音（注12）と同じ性質のものであることが、次の記述からわかります（伊波　1974：27）。

「濁音の場合には、子音のdは破裂に先つて、既に震動を始めてゐるが、有気音の場合には、tの破裂が母音aの震動に先つてゐる。そして無気音の場合には、ʔt（或は’t）の破裂が母音aの震動と同時に起つて、正に両者の中間の状態にあることが知れる。聞いた感じが稍、濁音に近いのは、専らその為である。」

上の記述でわかるように濃音と喜界島方言の喉頭化音はともに声門閉鎖音（ ʔ）をともなう音であるだけでなく、濁音（有声音）にも聞きなされるような音であるとみられます。

このように濃音が声門閉鎖音をともない、有声音にも聞きなされるような音とみられることについては次の記述（姜　1993:109）も参考になるでしょう。

「15世紀の文献ではハングルの全濁文字が二つの用途に使われて,東国正韻式漢字音と洪武正韻訳訓の字音の表記においては字音の有声音を表わし,韓国語の表記では濃音を表わそうとしたように考えられる。しかし、その当時の韓国の先人達が,字音の有声音を濃音のように認識していたのかも知しれない。（略）」

ところで『訓民正音』（解例本）の各自並書表記は中古音全濁声母（通説で有声音）で規定され、「凝る」の特徴をもっていました。そこで現代語の濃音の性質から「凝る」の特徴は声門閉鎖音（ ʔ）をともない有声音にも聞きなされるような音であったと考えてみます。また前節では「凝る」の特徴をαの特徴と濃音の特徴を持つものと考え、「凝る」→s→濃音の変化を考えました。そこで「凝る」はα（有声音）と濃音（声門閉鎖音； ʔ）の二つの特徴をもっていたと考えれば、「凝る」の一つの特徴であったα（有声音）が消失し、中世に濃音が現われたことをうまく説明できるでしょう。これが前節で長方体をつかって説明した「凝る」から濃音への変化にたいするアイディアです。しかしこのアイディアは古代の「凝る」が現在の濃音に変化したこと（通説の「濃音の発生」）をうまく説明できるのですが、「凝る」からsへの変化を説明することができません。そこでこのアイディアの欠点を取りのぞくために前節の正面（古代）と側面（現代）、また「凝る」の特徴がαと濃音の特徴の二つを持っていたとする、二元的な考え方を破棄することにします。そしてそのかわりに一元的に正面からみることにして、「凝る」の特徴も二元的なα＋濃音の特徴ではなく、αと濃音の特徴を同時にあわせもつ、つまりαと濃音の特徴が一体化したものであったと一元的に考えます。そして「凝る」にあったαの特徴がsに変化し、中世頃よりそのsが濃音として表面にあらわれたと考えてみます。また第3節で「尸」から現在の濃音にいたる変化を「尸」（***r***ʔ）→「叱」（***s***ʔ）→語間字（***s***）→ㅅ（s：属格）→Ø（消失：濃音）のように考えました。

そこでこれらの変化を考え合せると、「凝る」（αと濃音の一体化したもの）から濃音（ ʔ）への変化を、次のように考えることができるでしょう。

|  |  |
| --- | --- |
|  | αが***r***に変化　***r***が***s***に変化　　***s***がsに変化　　　sが消失 |
| 発音 | 「凝る」--------→***r***ʔ----------→***s***ʔ------------→sʔ-----------→ʔ（濃音） |
| 表記 | 各自並書表記---→「尸」-----→「叱」---→「間のㅅ」/ㅅ------→ㅅ消失 |
|  | 各自並書表記　　　郷歌の末音添記　　　（属格もどき/属格）　合用/各自並書表記 |

←----------------（濃音は表面上あらわれず）--→（表面上）濃音があらわれる

＊「凝る」：αと濃音の一体化したもの。また声門閉鎖音（ ʔ）は古代以来存在したと考えてあります。

＊中世以降「先行語の末音を内破化し、後行語の頭音を濃音化」（李基文　1975：140）したため属格のㅅは消失しています。

＊αを有声音とは考えません（注13をみてください）。詳しくはのちの更新で考えます。

このようにαと濃音の一体化したものを「凝る」の特徴と考えると、「凝る」→s→濃音への変化を、つまり『訓民正音』時代には「凝る」の特徴が各自並書表記され、中世以後ㅅが濃音符号として使用され、あるいは各自並書表記が復活して濃音が発生したように見えることをうまく説明できるでしょう。

ところで『訓民正音』時代に各自並書表記された「凝る」は現在濃音（ ʔ）に変化しています。そこで閉鎖音C（k,t,p）の有声音（g,d,b）を***C***（g,d,b）と表記し、「凝る」の特徴を有声音（α）と濃音（声門閉鎖音； ʔ）の一体化したものとみると、「凝る」の変化は***C*** ʔ→***r***ʔ→***s***ʔ→sʔ→ʔのように考えることができるでしょう。しかしd→rの変化はよくみられる変化ですが、声門閉鎖音をもつ有声音（有声音と声門閉鎖音が一体化した音）gʔやbʔが***r***ʔに変化することは考えにくいことです。また声門閉鎖音をもつ有声音***C*** ʔの存在は報告されていない（服部　1951:141－2参照）ようなので、αの特徴を有声音であると考えることについては疑問が残ります（注13）。では「凝る」のもう一つの特徴αが有声音でないとするならこのαは何だったのでしょうか。この疑問を解くにはまだまだ長い考察が必要です。

そこで次節ではこの疑問を解くための糸口となる、郷歌の末音添記について考えることにします。

1. 郷歌の末音添記について考える

第2節で郷歌の彗星歌の「城叱」の「「」は잣の末音たるㅅを表はしたもの」（小倉　昭和49：216）、あるいは隨喜功徳歌の「心音」などはその語末に「「音」という字を添え，その字音（ɨm）を利用して，末尾がmで終わる語であることを示して」（福井　2013：180）いるとの考えを紹介しました。

しかしこのような末音添記がなされていない表記（無添記）も郷歌には次のようにみられます（李鍾徹　1991：42－3）。

「A.イ.a. 春（皆理米）＜慕＞（略）

ロ.a. 白〜（雲）＜讃＞（略）

ハ.a.遊（行）〜＜処＞（略）」

＊慕：慕竹旨郎歌。讃：讃耆婆郎歌。処：處容歌。

＊イ. a.「去隠春」。ロ. a.「白雲音」。ハ.a.「遊行如可」。

上例の末音添記がなされていない無添記について李鍾徹氏はイ.aにたいして「末音添記字がなくても読む場合に別に問題になることはないと推定され」、またロ.aにたいして「無添記である文法形態素を容易に補読でき」、そしてハ.aにたいして「副動詞語尾「아/어」を表す文法形態素がなくても容易にこれを補読することが出来る」（上書：43,44,44）とみられました。たとえば上の「去隠春」はそのまま「行く春」、また「白雲音」もそのまま「白い雲」と理解できます。しかし隨喜功徳歌の「嫉妬叱心音」は「去隠春」と同じように「嫉妬叱心」で十分意味が理解できるとみられるのに「音」が添記されています。また祭亡妹歌の「辭叱都」にもわざわざ無意味と思われる「叱」の添記がみられます。上のように末音添記された「音」「叱」「尸」によって「どれが語彙的意味を表わす要素で,どれが文法的意味を表す形式であるかの境界が見分けやすくなってい」（福井　2013：180原注2）るのも事実ですが、それは現代人の我々にとっての効用というべきものでしょう。そこで疑問が起こるのですが、なぜ「去隠春」には末音添記がなく、「嫉妬叱心音」や「辭叱都」には「音」や「叱」が末音添記されているのでしょうか。

この問題を考えるために「心」にみられる末音添記を次にみてみることにします（金完鎭　1980：180,189,193，211,206-7,119,53-4/80-1/157-8,144-5）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 轉字 | 轉写 | 郷歌名 |
| 心音 | mʌzʌm | mʌzʌm | 隨喜功徳歌 |
| 心音 | mʌzʌm-mɨr | mʌzʌmmɨr | 請佛住世歌 |
| 心下 | mʌzʌm-ha | mʌzʌmha | 常隨佛學歌 |
| 心聞 | mʌzʌm-mɨn | mʌzʌmʌn | 悼二將歌 |
| 心音阿 | mʌzʌm-’ɨm-’a | mʌzʌma | 總結無盡歌 |
| 心音矣 | mʌzʌm-’ɨm-’ɨi | mʌzʌmʌi | 兜率歌 |
| 心未 | mʌzʌm-mɨi | 慕竹旨郎歌・讃耆婆郎歌・禮敬諸佛歌 |
| 心米 | mʌzʌm-mʌi | 遇賊歌 |

＊請佛住世歌の「夜未」：pam-mɨi→pamai（「夜に」；金完鎭　1980：188－9）。

たとえば上の「心未」や「心聞」は「心」に「未」や「聞」を添記することによって「心」（mʌzʌm）とそれに続く文法接辞’ʌiや’ʌnが見分けやすくなっています。ところが「心音」は「心」に何の接辞も後続しないのに「音」が添記されています。もしmʌzʌmʌiを表記するならば「心矣」（mʌzʌm-’ ʌi→mʌzʌmʌi）で充分とみられるのに兜率歌では「心音矣」のように「音」が添記されています。また處容歌の「夜入伊」（「夜に至るまで」；小倉　昭和49：182）では無添記ですが、慕竹旨郎歌の「宿尸夜音」（「眠る夜」；同書：155）では「音」が添記されています。このようにみてくると「心」と「心音」の違い、あるいは「心音」と「心音矣」、また「夜」と「夜音」の違いは何なのかという疑問がわいてくるでしょう。

ところで『雞林類事』（12世紀初頭）では、次のように基礎語とみられる語にも字音語がみられます（前間　昭和49：184,191,219,240）。

「千曰千

쳔　　鮮初に漢語として字音の쳔もつかはれているが、「千」には（原注一）즈믄といふ語が常に話された。（以下、省略）。

東西南北同

この四つの語は大抵宋音に同じとのことである。

（原注一）도ᇰ（以下の各項には（原注一）셔,（原注一）남,（原注一）븍の字音が示されています）

人曰人  
　인　　これは字音で、「ひと」は高麗も（原注一）사ᄅᆞᆷといつたであらう。（以下、省略）

心曰心音尋  
심　　これは漢字音に過ぎない。（略）心懐は（原注三）ᄆᆞᅀᆞᆷといつたであらう。鮮初にᄆᆞᅀᆞᆷは（原注四）ᄆᆞ옴ともいはれた。（後略）。」

このように12世紀には早くも漢字語が固有語を侵食し始めているので、郷歌中の『均如傳』（1075年）隨喜功徳歌で「心音」と表記された理由は固有語ではなく、借用漢字音を示すためのものではないかという考えがでてくるでしょう。しかし「心」（「中古音侵韻A類siĕm/朝鮮語字音sim」；伊藤　平成19：本文篇175）に「音」（「侵韻B類’ɪĕm/朝鮮語字音’im」；同書：本文篇177）を添記しても、「心音」は（sim-’im→）sim、また固有語「心」の訓はmʌzʌmで、それらの末音はどちらもmになります。つまり「心」に「音」を添記しても訓で読むか、字音で読むかを指定できないので、語形識別のために「音」を添記したとは考えにくいでしょう。では音訓の区別のために「音」が添記されたのではないとすれば末音添記の理由は何でしょうか。

そこでその理由を考えるために今度は「秋」に対する郷歌の表記を次にみてみることにします（小倉　昭和49：116,212,224/金完鎭　1980：184-5,124,137-8/梁　1965：799,552,613）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  |  | 小倉 | 金完鎭 | 梁柱東 | 小倉訳 |
| A | 秋察羅 | kʌzʌr-zʌr- 'ʌr（目的格） | kʌzʌr-char-ra→kʌzʌr ra | kʌzʌr-r | 秋を |
| B | 秋察 | kʌzʌr-zʌr | kʌzʌr-char→kʌzʌr | kʌzʌr-zʌr | 秋の |
| C | 秋察尸 | kʌzʌr-zʌr-r | kʌzʌr-char-r→kʌzʌr | kʌzʌr-r | 秋の |

＊A：請轉法輪歌。B: 祭亡妹歌。C：怨歌。

＊各氏のハングルは筆者が翻字しました。

＊「秋察羅」：この「秋察」は「初めはᄀᆞᅀᆞᆯ절とも讀んで見たが、ᄀᆞᅀᆞᆯのᅀᆞᆯに宛てたと見るのが穏當のやうに思はれる（略）。次なる「羅」は目的格のᄋᆞᆯを表はしたものである。（略）」（小倉　昭和49：116）。また「秋察尸」の「尸」は「「秋察羅」の「羅」と同様の意義に於て使用せられたものである。」（同書：224）。

　　ところで金完鎭氏はAの「秋察羅」を「秋察　羅波處也」（kʌzʌr raβʌtʌjə金完鎭：1980：185)のように解釈されているので、Bの「秋察」と同じであるとみることができます。そこで「秋察羅」はのぞいて、「秋」と「秋察」・「秋察尸」の違いを考えることにします。もし末音のrを指し示すためであれば「尸」（r）もしくは「察」（char）の添記で充分と思われますが、「秋察尸」は「察」のあとにさらに「尸」が添記されています。そこで疑問がわくのですが、「察」のあとにさらに「尸」が添記された理由は何だったのでしょうか。この疑問を解くために「秋」と「秋察」はkʌzʌrとkʌcharの違い、また「尸」（未実現連体形）には声門閉鎖音が存在していたとみられるので、「秋察」と「秋察尸」はkʌcharとkʌcharʔの違いであったとみてみます。

この考えを理解しやすいように図式化すると、次のようになります。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 秋 | 秋察 | 秋察尸 |
| 転字 | kʌzʌr | kʌzʌr-char | kʌzʌr-char-rʔ |
| 発音 | kʌɴʔsʌrʔ | kʌchʌr | kʌchʌrʔ |
| 通説 | kʌzʌr | | |

＊「秋」：ここではᄀᆞᅀᆞᆯはkʌɴʔsʌrʔ（現代語は가을）としてあります。以下のz,βはㅿ/ㅸ。

＊「z,βはk,t,c,s等と連接すればs,pとなった。uz-（笑う）、toβ-（助ける）等に-koが連結すればus・ko,top・koになった。」（李基文　1975：154）。そこでㅿをɴʔs（通説はz）として‘ゆるやかな声立て’への変化（ʔ→’；第８節を参照ください）を勘案するとuɴʔsko→usɴko（＝us’ko）→uskoとなるでしょう。同様にᄀᆞᅀᆞᆯはkʌɴʔsʌrʔ→kʌɴɨr（‘ゆるやかな声立て’への変化、中声のㆍ（天）の第１段階の変化ʌ→ɨ；李基文　1975：157）→ka’ɨr（＝kaɨr、第２段階の変化ʌɴ→aへの変化;同書：226）と考えることができるでしょう。ここでは中声のㆍ（天）字はʌで翻字してあります。のちの更新で詳しく考察します。

そこで「秋」と「秋察」、また「秋察尸」の発音を上のように考えると、それらの表記の違いはそれらの語の間にある微細な音差を示すためであったとみることができるでしょう。このように考えると「去隠春」の「春」や「白雲音」の「白」が無添記なのは、「春」や「白」を「pom」や「hʌin」（hʌinは連體法；前間　昭和49：189,262）そのままに読むことを示しているとみることができるでしょう。

ところで末音添記には忘れてはならない特徴的な「音」字があり、郷歌には「夜音」（慕竹旨郎歌）や「白雲音」（讃耆婆郎歌）など多くの「音」の添記がみられます（注14）。そこでこの「音」字の多さを考えると、単なる語末の語形を指し示すために「音」が添記されたとみるより、「心音」のように表記することで「心」とは微細な音の違いがあることを表わしたと考えるほうが理に適っているでしょう。そこで「心」の末音をm、「心音」の末音をmとは微細な違いのあるmもどきのMとみれば、「心」（mʌzʌm）と「心音」（mʌzʌM）の末音mとMにはどんな音の違いがあったのでしょうか。

次節ではこの末音添記された「音」の末音Mについて考えることにします。

1. 郷歌の「掌音」について考える

前節で「心音」の末音はmとは微細な違いのあるMと考えました。そこでこのMがどんな音であるかを探るために、もう一度禱千手観音歌の「二尸掌音」について考えてみることにします。

第3節でみたように「二尸掌音」を金完鎭はsonpʌrʌm（金完鎭　1980：97）と転写され、その現代語訳を「두 손바닥」（「二つの掌」；同書：107）とされています。そこで金完鎭氏はsonpʌrʌm（「手」・「かべ」）と現代語sonpatak（「手」・「そこ」→「手のひら」）（天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55改訂版：353,223,222,353）との関係を考えられたのですが、古代語にsonparʌmのような語は存在したのでしょうか。

このような疑問が起こると、「末音添記字を安易に読むべきではない」という金東昭氏の次のような批判がでてくるでしょう（金東昭　2003：46）。

「しかし,‘掌音’[千手観音歌], ‘道尸掃尸星利’[彗星歌]を‘손바다ᇰ’、‘길ᄡᅳᆯ별’と読むのは論理的におかしい。‘夜音’と‘道尸’から‘音’を-mと読み‘尸’を-rと読んだなら、‘掌音’の末音も-mを持たねばならず、‘星尸’ではない‘星利’は‘별’と読んでもいけない。これらを‘손ᄇᆞᄅᆞᆷ、벼리’と読めば合理的であろうが古代韓国語にこのような語形があったという別の証拠がない限り確証は持てないのである。」

上の批判は末音添記の原則は守るべきだが、その原則にこだわりすぎて架空の古代語を生みだすことには慎重になるべきであることを教えています。

しかし上の批判に反して末音添記の原則にはずれる、次のような考えが小倉氏にみられます（小倉　昭和49：193）。

「「音」は郷歌に於ては普通に「人音」（사ᄅᆞᆷ）・「心音」（ᄆᆞᅀᆞᆷ）等の如く、m音の代りに用ひられることが多いが、「叱如」をᅌᅵ다（郷歌第四　の（5）参照）、「支所物生」を괴바ᅌᅵᆫ 物生 （郷歌第十四の（5）参照）などいふ場合には、ng又はn等の代りに用ひられて居る。随つて本郷歌「掌音」を손바다ᇰと讀み、바다ᇰの末音ngに「音」を宛てることは決して不自然とは思はれぬ。」

そこで上の小倉氏のアイディアから「掌音」の「音」の末音をmではなくŋ（＝ng）とみて、sonpatam→sonpataŋの変化からsonpatak（「手・底」→現代語「手のひら」）との関係をみることができるでしょう。

また郷歌の末音添記された「音」の末音をmとみずにŋやnとみるような考えは次のように梁氏にもみられます（小倉　昭和49:162－3,167－8,172,203－4,85-8,125、金完鎭1980：68,71,72, 111,175,193、梁　1965：237,280-1,316,506－9,752-3,820）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 語句 | 小倉 | 金完鎭（轉写） | 梁 |
| 1 | 献乎理音如 | tɨr’i’oriŋita | pato rimta | patcʌβ’oriŋita |
| 2 | 所音物生（A） | pa’in物生 | paramʌrssʌi | son 物生 |
| 3 | 太平恨音叱如 | 太平（’i）ha’oaŋita | 太平hʌnʌmsta（B） | 太平hʌniŋista |
| 4 | 悩叱古音郷言云報言也多可攴 | nui’oskiŋitaka | kʌskom hamcʌk | nitkomtaka |
| 5 | 出隠伊音叱如支 | naniŋita | nanimsta | naniŋista |
| 6 | 逐好友伊音叱多 | cochaŋita | cocho pətjəmsta | cochuriŋista |

＊1：献花歌。2・3：安民歌。4：願往生歌。5：懺悔業障歌。6：常隨佛學歌。

＊A：koirpa’in物生(「支ふる所の者」；小倉　昭和49:163)。

＊B：現代語訳は「太平’ ɨr 持續hanɨnira」（金完鎭1980：80）。

上表から小倉・梁氏は「音」（中古音「ʔɪĕm」； 藤堂・小林共著　昭和46:101,朝鮮漢字音「’ɨm」；伊藤　平成19：本文篇177）の末音をŋiやnなどと読まれ、金完鎭氏は末音添記の原則通りすべてmに読まれているのがわかります。

ところで「伊音叱如支」の「音」について小倉氏に次のような考えがみられます（小倉　昭和49：85）。

「「伊音叱如支」の「音」は吏讀にありては「適音」（맛침）・「侤音」（다짐）・「舎音」（말음）などいつて、多くはm音を表はすに用ひられるが、「持音」（디닌）（「持つて居る」の義）などの場合にはnの代りに用ひられて居る。つまり「音」はm及びnなる鼻音の代りに用ひられたのであるから、其の字がㆁ即ちngの音に代用せられ得べきことも不都合が無い。余は本條に於ける「音」は此のㆁ音を表はしたものと見たい。」

また共遜法のŋiが後世’iに変化したとみることができると、小倉氏は次のように述べられています（小倉　昭和49:86－7）。

「ᅌᅵ다は今日普通に用ひられぬ語であるが、古語に於ける一種の謙譲法で、ᅌᅵは正しくはㅇならぬㆁを以て書き表はされて居る。例へば

nai ka ri mar 'i na（人請去矣）。〔龍飛御天歌〕（翻字は筆者、以下4例は省略）

の如きは其の例である。此のᅌᅵが鼻音であって이でないことは稍、後世ではあるが、「捷解新語」に（改行、3例略）

　아ᄅᆞᆷ다다（めでたうこそ御座る）。（1例略）

などと、ㆁ（ng）を其の上なる綴字の末部に附けてあるのでも明かに知ることが出來よう。此のᅌᅵ다は古くより今日の如く이다に轉じたらしく、同じ郷歌の中にすら「都乎隠多」（두오니이다、郷歌第二十五の8）参照）とてᅌᅵを이と發音した形跡を發見することが出來、尚ほ後世になると「書傳諺解」等には  
　岳曰否德ᅵ　라忝帝位ᄒᆞ리　이다（1例、略）

などと이を明記してある。（以下、省略）」

このように小倉氏は「音」の末音をŋやnに解釈されました。しかしこのような解釈はあまりにも独断的で、言語学の常識から外れているとみられ、次のような疑問がだされています（李基文　1975：91）

「一方共遜法は、郷歌からうまく確認されない。「献花歌」の「献乎理音如」の「音」字が、中世語の共遜法語尾-ŋi-に該当するものと見られる。しかし一般的にmを表わした「音」が、これに使用された理由を説明することはむつかしい。」

＊共遜法：「聞き手に対する敬意を表す」（下例とともに福井　2013：165）。

「puthje-i tʌ’oi-si-ri-roso-ŋi-ta（釋譜3：2a）

仏-に なる-尊敬-未来-感嘆-共遜-終止  
「仏におなりになられることでしょう」」（筆者注：ハングルは省略）。

たしかに上の批判にあるように、末音mを表わした「音」が共遜法のŋiとして使用された理由を説明することは難しいものがあります。そのため末音添記された「音」の末音はすべてmで解釈すべきという金完鎭氏や先の金東昭氏のような考えがでてくるのも当然でしょう。しかし「掌音」の「音」の末音をmとみてsonpatam→sonpataŋのような変化を考えれば、古代語sonpatamと現代語sonpatakを関係づけることができることは先にみました。ところで鼻音mの変化はm→n→ŋが自然で、m→ŋのような直接的な変化はありえないと考えられます。そこでm→ŋのようなありえない変化を考えないために末音添記された「音」の末音をmとみる解釈は破棄することにします。そしてそのかわりに前節の「心音」で考えたように、「音」が添記された「掌音」の末音はmとは微細な違いのあるmとまぎれるMと考え、M→ŋのような直接的な変化を想定します。このような一見ありそうもなくみえる変化を考えれば、末音添記の「音」を共遜法のŋiや「掌音」の「音」の末音ŋとして解釈することが可能となるでしょう。

そこでM→ŋの直接的な変化を起こす「音」の末音Mの正体をさぐるために、**次節では中古音と朝鮮漢字音の入声について考えることにします。**

1. **中古音と朝鮮漢字音の入声について考える**

中国語中古音入声と朝鮮漢字音入声の関係について金東昭氏の記述をまとめると、次のようになります（金東昭　2003：147）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 『東國正韻』 | 『洪武正韻譯訓』 | 『六祖』 |
| 「質」 | 지ᇙ（cirʔ） | 짇(南方音:cit)/지ᇹ(北方音:ciʔ) | 질（cir） |

＊『東國正韻』：申叔舟等編（1448年刊）。「訓民正音の創制とともに行われた漢字音の改新の結果をまとめたもの」（福井　2013：232）。  
＊『洪武正韻譯訓』：申叔舟等編（1455年刊）。「明の韻書『洪武正韻』（1375）をハングルによって注音したもの」（同書：233）。

＊『六祖』：『六祖法寶檀經諺解』（1496年刊）。「唐の六祖大師慧能の説法をまとめたものを諺解したもの。仁粋大妃の命により学祖が翻訳したと考えられている。」（同書：243）。

＊声調（傍点）は省略。ㆆ：声門閉鎖音（/ʔ/）。

このように『訓民正音』（解例本）終声解でrと規定された中古音舌内入声の「質」の末音は、『東国正韻』では「影母（ㆆ）をもって来母（ㄹ）を補」（趙2010:182）い、ㅭ（rʔ）であるとされています。

また入声薬韻について『四声通攷』の凡例中（下記の引用1；姜　1993：225）と『四声通解』の凡例中（下記の引用2；小倉　昭和50:267）に次のような記述がみられます。

1．「この訳訓（筆者注：『洪武正韻譯訓』）の諸韻において，俗音終声は喉音全清音（字）であるㆆ[ʔ]で表わし，薬韻は唇軽音全清音（字）であるㅸ[f]で表わして，これらを区別した。」

＊上文は「故俗音終聲於諸韻用喉音全淸ㆆ, 藥韻用唇輕全清ㅸ以別之」（小倉　昭和50:267）の姜氏訳。

2．「故今撰通解又不加終聲,通攷於諸韻入聲則皆加影母爲字，唯薬韻則其呼似乎效韻之音，故蒙韻加ㅱ爲字，通攷加ㅸ爲字，今亦從通攷加ㅸ爲字」

＊上の中国語に付された〇印のルビはすべて省略。  
＊『四声通解』：「『洪武正韻訳訓』（一六巻）は中国の『洪武正韻』に正音文字で音をつけたもので、端宗三年（一四五五）に刊行された。（略）この『洪武正韻訳訓』は浩瀚なのでこれを抄約したのが『四声通攷』であったが、現在伝わらない。ただこの本を改修した崔世珍の『四声通解』（中宗十二年、一五一七）があり、その末尾に『四声通攷』の凡例が付載されている。」（李基文　1975：126）。

つまり入声薬韻（末音k；相配する陽韻の末音はŋ）は入声質韻（末音t;『東国正韻』ではㅭ：rʔ）とは違う何らかの特色（ㅸ）を持っていたと考えることができるでしょう。

ところで入声鐸韻(末音k；相配する唐韻の末音はŋ）の「悪」が梵語aḥの翻訳字として用いられていることについて、次のような考えがあります（尾崎　昭和55：132）。

「いわゆる四十九根本字梵語aḥ音節に對して佛教者の充てる漢字が、阿などと並んでたとえば玄應、不空などで惡の字であることを想い起こしてもいい。（以下、省略）」

＊入声薬韻は宕摂内転31開2,3,4等・内転32合3等、また入声鐸韻は宕摂内転31開1等・内転32合1等。

＊「悪」：影母鐸韻入声1等ʔak。「阿」：影母歌韻平声1等 ʔa。  
＊サンスクリットの「気音hの正確な音価は明らかでないが，古代の音声学者は有声と教えている。一般に，語末にのみあらわれるḥ（visarga）は無声である。」（亀井ほか　1989：127）。

　上の記述から唐代7－8世紀頃サンスクリットのa（अ、現代ヒンディー語/ə/）とは別の音であるaḥ（अः）を「阿」字（ʔa）だけでなく、鐸韻の「悪」字（ʔak）を用いて訳していることがわかります。そこで当時の「悪」は ʔak（外破）から ʔak（内破）を経て、ʔahの状態に変化していたとみることができるでしょう。つまり「悪」の語末はʔaのあとに気音が存在するʔahであったために、「悪」字でサンスクリットのaḥ（अः）を写すことができたと考えることができます。このように中古入声質韻の末音は声門閉鎖音（/ʔ/）、鐸韻の末音はh、そして薬韻の末音はㅸであったとみることができるでしょう。

　ところで『東国正韻』では朝鮮漢字音の終声について、次のような記述がみられます（姜　1993:99）。

「中古音の/-aw/と/əw/は，韓国漢字音で各々/-o/と/-u/に変化して，韻尾の/-w/が主音に吸収されたのに，『東国正韻』では韻尾（終声）として，-w系字音の終りにㅱ[w]字を表記した。そして-zero系と-j系字音の終りにはㅇ[zero]字を付け加えた。これは,字音は必ず初・中・終声を具えていなければならないと考えていた結果から出たものである。（改行、以下の2例につづく）

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 中古音 | 『東国正韻』 | 初声 | 中声 | | | 終声 |
| 快（蟹摂夬韻去韻khuāi） | 쾡khoai’ | ㅋkh | ㅗw | ㅏa | ㅣj | ㅇ’ |
| 高（效摂豪韻平声kau） | 고ᇢkow | ㄱk | ㅗo | | | ㅱW |

＊夬韻：「14転入声欄に寄入」（平山　昭和42：147）。筆者により上・下表にまとめました。

但し、固有語の終声表記には, ㅱとㅇを使わなかった。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 語 | 初声 | 中声 | | | | 終声 |
| 감 | ㄱ | ㅏ | | | | ㅁ |
| kam | [k] | [a] | | | | [m] |
| 별 | ㅂ | ㅣ | | ㅓ | | ㄹ |
| pjəl | [p] | [j] | | [ə] | | [l] |
| 궤 | ㄱ | ㅜ | ㅓ | | ㅣ | - |
| kwəj | [k] | [w] | [ə] | | [j] | - |

」

＊k‘はkhに改めました。ɱ：通説では唇歯鼻音（/ɱ/）。

＊上にみられる連書字ㅱ（w）は中国語の軽唇音の非母・敷母・奉母・微母（それぞれf,fh,v,ɱ）を表記するための文字（ㅸ・ㆄ・ㅹ・ㅱ）の一つです（趙　2010：41－2）。

このㅱ（w）については次のような観察があります（河野　昭和40:三五）。

「このwという文字は元来中国音韻学の微母を示すものであって、その文字はm（明母）と’（喩母）との合成である。已に訓民正音に明記されている通りいわゆる軽唇音の系列はすべて重唇音の文字に喩母’を加えて示される（筆者注：ㅸㆄㅹㅱ）。（略）この微母の文字は中期語諸文献以降、朝鮮語を示すには全く用いられないが、中期語の文献では漢字音に用いられることがある。その字音は流摂及び効摂に属するもので、この両摂の字音の韻尾をこの微母で示している。例えば流をryuw、好をhowの如くである。（以下、省略）」（注15）

＊上の連書字のなかで「韓国語の表記にはㅸだけが使われ」（姜　1993:99）ました。

＊半舌軽音（ᄛ）については、前回更新の「３．半舌軽音を考える」をみてください。

http://ichhan.sakura.ne.jp/korean/korean1hp.docx

ところで前回の更新でㅇについて考察しましたが、前回の考えを簡単にまとめると次のようになります。

発声の仕方に‘はっきりした声立て’と ‘ゆるやかな声立て’の違いを考えます。そして‘はっきりした声立て’から‘ゆるやかな声立て’への変化をㆆ（/ʔ/）→ㅇ（/’/）のように考えます。また『訓民正音』（解例本）終声解で「緩急」は不清不濁の鼻音と無声子音との対立と規定している（趙　2010:84－5）ので、「急」をㆆ（ ʔ：声門閉鎖音）とみると、それと対立する「緩」はㅇ（ɴ：口蓋垂鼻音/ɴ/、撥音の「ん」）とみることができます。また終声解の「ㅇは音声が淡くてろ」（同書:83）で、制字解の「ㆁが牙音に属すのにもかかわらずㅇと似ている」（同書:36）という記述（ㆁ≑ㅇ）はㆁ（軟口蓋鼻音/ŋ/）→ㅇ（口蓋垂鼻音/ɴ/）→ø（ø：消失）のような変化を考えることでうまく解釈できるでしょう。また合字解の「初声のㆆはㅇと似かよっており、朝鮮語においてはㅇで通用させることができる」（同書:100）との記述は‘はっきりした声立て’（ʔ：ㆆ） と‘ゆるやかな声立て’（ ɴ：ㅇ）の対立がなくなり（声門閉鎖音 ʔが消失して ）、‘ゆるやかな声立て’（口蓋垂鼻音/ɴ/）に変わったためとみることができるでしょう。

＊注10で書いたように促音の変化をʔ→Qと考えるべきでないとすれば、‘ゆるやかな声立て’への変化はɴʔ→ɴ（＝ㅇ：口蓋垂鼻音/ɴ/）、もしくは ʔ（＝ㆆ：声門閉鎖音/ʔ/）のような変化を考えるべきでしょうが、今はㆆ（/ʔ/）→ㅇ（/’/）のように考えておきます。のちの更新で詳しく考えます。

＊制字解の一般的な解釈はㆆ（ʔ：影母）/ㅇ（zero,またはj・ɦなど：喩母）（姜　1993:111）。

そこでこのようにㅇをɴ（口蓋垂鼻音/ɴ/）とすると、朝鮮借用漢字「快」（쾡：khoai’）はkhoaiɴであり、その末音ɴをㅇで表記したと考えることができるでしょう。のちの更新で詳しく考えます。  
　ここで中国中古音・中期朝鮮漢字音の終声表記をまとめておきます。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | -t（質韻） | -k（薬韻） | -k（鐸韻） | 流摂・効摂 | 模・灰韻（A） |
| 中国中古音 | （t→）ʔ | （k→）ʔ | （k→）h | au/ou | zero/aj |
| 中期朝鮮漢字音 | ㅭ | ㅸ | h | ㅱ | ㅇ |

＊A：「昔時は支（筆者注：-zero系字音、以下も筆者注）・齊（-j系字音）・魚・模（-zero系字音）・皆・灰（-j系字音）諸韻の漢字の末尾に之（筆者注：ㅇ）を附したが、後世全く使用せられざるに至つた」（小倉　昭和50：222）。

＊B：「尺曰作（改行）자　　尺の（原注一）자音は新羅の上代から「尺」で자音を寫してゐて舊い由來の語である。（以下、省略）」（前間　昭和49：265）との記述があります。また「尺」（tʃhɪek；昔韻入声3等）を「作」（tsak；鐸韻入声1等）で表記しているので、この「尺」の末音は先にみた「悪」の末音と同じhとみられるでしょう。

＊前回の更新の「６. 終声字を考える」のおわりに、上の終声字表記（ʔ/ㅸ/ㅱ/ㅇ）をまとめてあります。  
　<http://ichhan.sakura.ne.jp/korean/korean1hp.docx>

1. **連書字ㅱについて考える**

前節では中期朝鮮漢字音の終声表記について考え、そのなかで終声に付加されたㅇについては筆者の新しい考えを示しておきました。また終声ㅸについてはまた後ほどの更新で詳しく考察するとして、この節では残るㅱについて考えることにします。

初声ㅱは中国語次濁（清濁）声母の微母を表記するために作られた連書字で、このㅱにたいして『訓民正音』（解例本）初声・終声解には特別の規定はありません。また合字解では「初声・中声・終声の三要素は、組み合わせて一文字を作る」（趙　2010：91）と規定されています。しかし『訓民正音』（解例本）用字例には固有語の終声にㅱが表記された用例がみられない（同書：117）ので、その当時の固有語の終声にはㅱ音が存在しなかったと考えられます。そこで借用漢字の終声にのみㅱが表記されたのは、「字音は必ず初・中・終声を具えていなければならないと考え」（姜　1993:99）たためとみられそうです。しかし前節でみたように中古音入声の質韻や薬韻に対する中期朝鮮漢字音の末音はʔやㅸであることからㅇやㅸ、またㅱはやはり実体のある音だったと考えるのがよいでしょう。そこでㅱも実体のある音であったという考えのもとに、そのㅱがどのようなものであったのかを探っていくことにします。

ㅱは『海東諸國紀』附載の「語音翻譯」（1501年）に「我」の首里語訳の表記として、次のように使用されています（伊波1974：58）。

「我是日本國的人ᄝᅶᆫ야마도피츄（wan yamatʋ　fich‘ʋ）（改行）私は日本人。（以下、略）」

＊東條　昭和44：付録の写真1にᄝᅶᆫの文字がみられます。  
＊『海東諸國紀』：「1471年（成宗2年）申叔舟によって書かれた本で、日本と琉球国の事情を漢文で書き、巻末の部分で‘語音翻譯’として、琉球語の単語と文章170個程がハングルで記されてい」（金東昭　2003：129）ます。

また現代の首里語に「’waɴ⓪（名）わたし。私。（略）」（国立国語研究所編　昭和51：590）があり、語音翻訳のᄝᅶᆫ（wan）の後裔が現代語’waɴであると考えることができるでしょう。

そこで「語音翻譯」とほぼ同時代の『伊路波』、また17世紀以後の『捷解新語』『重刊改修捷解新語』『倭語類解』『客館璀粲集』におけるイロハ字に対するハングル表記をみてみると、次のようになっています。

＊『伊路波』：京都大學國語學國文學研究室編　昭和40：3-4, 二三の表。

＊『捷解新語』：同書：二三の表。

＊『重刊改修捷解新語』：同書：51－2。

＊『倭語類解』：同編　昭和33：解説（6）の表。

＊『客館璀粲集』：同編　昭和40：102。

＊『書史会要』：同編　昭和40：73－4。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 1492年 | 1676年開版 | 17-18世紀初 | 1719 | 1376刊 |
| 『伊路波』 | 『捷解新語』 | 『倭語類解』 | 『客館璀粲集』 | 『書史会要』 |
| ウ | wu(ᄝᅮ),’u（우） | ’u | ’u | ’u | 烏 |
| オ | ’o （오） | ’o | ’o | ’ə（어） | 和又近窩 |
| ス | n-zu（ᅀᅮ） | su,zu（su）（A） | sɨ（스） | chɨ（츠）（C） | 䟽又近徂 |
| ツ | tu | cu,ccu（cu） | cɨ | cɨ | 土平聲又近屠 |
| フ | fu（ᄫᅮ）, hu（후） | hu | hu | hu | 蒲又近夫 |
| ム | mu | mu | mu,’mu（B） | mɨ | 謨 |
| ル | ru | ru | rɨ | rɨ | 盧 |
| ワ | ’oa（와） | ’oa | ’oa | ’oa | 懐 |
| 京 | kjəw | kjə’u（mijakko） | kjə’u | － | － |

＊翻字は統一し、一部のみ（　）内にハングルを示しました。

＊「京」：교ᇢ（京都大學國語學國文學研究室編　昭和40：4）。

교우（同編　昭和47：114,115）/（同編　昭和33：66）。  
＊A：（　）の翻字は『重刊改修捷解新語』のもので、（　）の注記がないものは『捷解新語』に同じ。  
＊B：「馬　ᅃᅮ마」「厩　ᅃᅮ마야」「生　무마루」（同編　昭和33：156,63,82）。  
＊C：「すでに倭語類解などに見えるのであるが、ス・ツの音が非円唇性と言われる-ɯで表記されていることである。璀粲集では、ス・ツにとどまらず、ム・ルにまで及んでいる。（以下、略）」（同編　昭和40：66）。

＊『伊路波』：『弘治五年朝鮮板伊路波　本文・釋文・解題』。「司訳院において、倭学訳官採用の、所謂科試用書として開版され」（京都大學國語學國文學研究室編　昭和40：はしがき一）たもの。

＊『捷解新語』（10巻、1676）：「倭学書で、康遇聖が（略）一六一八年前後に作ったものなので、原稿の完成と刊行の間には少なくとも五十年の隔たりがある。」（李基文　1975：214）。  
＊『重刊改修捷解新語』：「第二次の「改修捷解新語」に重刊の際の序文を加えて」（京都大學國語學國文學研究室編　昭和48：278）1781年刊行された。

＊『倭語類解』：「17世紀末から18世紀にかけて」「科試用書として」（編者は洪舜明か）」（同編　昭和33：解説2）刊行されたもの。

＊『客館璀粲集』：享保4（1719）年朝鮮信使の来聘時「その際、蘭皐（実聞の号）と書記の耕牧子（姜柏の号）との問答に見られるもの」（京都大學國語學國文學研究室編　昭和40：五二）。

＊『書史会要』は陶宗儀により記された書家の伝記（明初1376年刊）。

上の『伊路波』の「ウ」に対するハングルᄝᅮと우の関係について浜田氏に次のような考えがみられます（京都大學國語學國文學研究室編　昭和40：二四）。

「『伊呂波』では「「内」に対して捷解新語と同様‘uをあてていることなどから考えても、（略）実際の発音はやはり‘uで表わさるべきものと変りはなかったと考えて差支えないと思う。」

上のように浜田氏はᄝᅮと우を同音とみられましたが、ではなぜこのような2種の同音表記がみられるのでしょうか。ᄝᅮと우が同音であれ、別音であれ考えるべき問題でしょう。

そこでこの問題を考えるために『伊路波』（1492年）にみえるイロハ音に対するハングル表記を表にすると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | ウ | オ・ヲ | ワ | ム | － |
| 『伊路波』 | 우/ᄝᅮ | 오 | 와 | 무 | ㅁ |
| 翻字 | ’u/m’u | ’o | ’oa | mu | m |

＊以下の考察のためにᄝᅮの翻字をwuからm’uに変更してあります。

ところで「現代語においては、先行する「ㅗ、ㅜ」が〔w〕に中和して、ㅘ（wa）、ㅝ（wə）として表われ」（金思燁　昭和56：119）ます。そして「先行する〔o〕〔u〕は多少円脣性が弱く、摩擦音化して、現代語の〔w〕へと移行する傾向をもっていたものと思われる」（同書：119-120）との考えがあります。そこで오（’o）と우（’u）が中和したとみれば、語音翻訳の首里語m’oan（ᄝᅶᆫ）から現在の’wanへの変化をᄝᅶᆫ（m’oan）→완（’oan）→’uan→’wanと考えることができるでしょう。そして語音翻訳のᄝᅶᆫ（m’oan）がwan（注16）であれば완（’oan）→’wanの変化からᄝᅶᆫ（m’oan）ではなく、완（’oan）でハングル表記できたと考えられます。しかしそれにもかかわらずわざわざㅁの下にㅇが連書されᄝᅶᆫ（m’oan）と表記されているので、ᄝᅶᆫ（m’oan）と완（’oan）とは別音とみて、その後완から現代首里語の‘wanに変化したとみるのが自然でしょう。そこでㅱは初声ㅁ（m）にㅇ（’）が連書されているので、ㅱ（m’）はmもどきの表記とみてㅱ（m’）をMと表記することにします。そして時代が下る『捷解新語』・『重刊改修捷解新語』・『倭語類解』・『客館璀粲集』ではウにたいして우（’u）の表記がなされているので、ᄝᅮ（Mu）→우（’u）の変化を考えることができるでしょう。

そこでM→’（ㅱ→ㅇ）の変化を考えると、前節の中古音「高」（効摂見母豪韻kau）を借入した『東国正韻』の「高」（「고ᇢkoW」；姜　1993：99）に対して、次のような変化を考えることができるでしょう。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 『東国正韻』　　　　　　　伝来漢字音 |
| 表記 | 고ᇢ（koM）-----（→ko’）---→koL |
| 発音 | koM-------------→koɴ ------→ko |

＊koL: Lは低調（伊藤　平成19：本文篇159）。

＊ko’→koの変化は‘ゆるやかな声立て’（ɴ：口蓋垂鼻音/ɴ/）が消失して、現代音koL になったと考えます。

ここで『伊路波』の와（’oa：ワ）と「語音翻譯」のMoan（ᄝᅶᆫ：「我」）、また郷歌の「心音」「掌音」にみえる末音添記の「音」を比較すると、次のようになります。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 中世 | 現在 |
| 本土方言のワ | 『伊呂波』(1492年)　와（’oa）---→ | wa（ワ） |
| 首里方言のワ | 「語音翻譯」(1501年）ᄝᅶᆫ（Moan）--→ | ’wan（ワン） |
| 「心音」 | mʌzʌM-----------------------------→ | ma’ɨm |
| 「掌音」 | sonpataM--------------------------→ | sonpapatak |

そこで「語音翻譯」と『伊呂波』の変化（それぞれMoan→’wan/’oa→wa）からMと’の表記と発音の関係をみてみると、次のようになるでしょう。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 郷歌の「心音」 | 「語音翻譯」 | 『伊呂波』 | 『捷解新語』 |
| 表記 | M | Mo | Mu/’u | ’u |
| 発音 | mもどき（→m） | uもどき（→u） | | u |

＊『東国正韻』の고ᇢ（koM；「高」）の末音Mの変化：ㅱ（M）→ㅇ（ɴ）→Ø（Ø：消失）。

ところで「元来微母はmv-（このmは歯唇音）>v->w-の過程を経たと考えられるが、明初において已にw段階に到達していたことが流効の両摂の韻尾標記に微母を用いたことによって判明する。というのは流効両摂の韻尾はu若しくはoであると考えられるから、微母が当時vであったと考えるよりwであったと考える方がより合理的であろう。」（河野　昭和40：三五）との考えがあります。この考えの正否は考えなければならない問題ですが、軽唇音の微母はㅱ（M）で表記されるので、軽唇音の変化（通説：ɱ→w）を参考にすると、郷歌で末音添記された「心音」などの末音Mの後裔が「語音翻譯」の語頭のㅱ（M）ではないかという考えがでてくるでしょう。ここまでの考察では「心音」の末音Mとㅱ（M）が実際どんな音だったのか不明ですが、そのM（mもどき）→ㅱ（Moはuもどき）の変化は考えるに値するアイディアです。この難しい問題であるM音の正体を知るためにはまだまだ長い考察（注17）が必要ですが、更新の日時もとっくに過ぎていますので、今回の考察はここまでにします。

次回の更新では末音添記された「心音」の末音Mの秘密を解く鍵である古代（中国語上古音）の入声について考察する予定です。

備考１．郷歌26首の歌名対照表

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 略号 | 金・梁氏（金完鎭　1980：5－6） | 小倉氏（小倉　昭和49：1－2） |
| 1 |  | 慕竹旨郎歌 | 第十二　得烏谷慕郎歌 |
| 2 |  | 獻花歌 | 第十三　老人獻花歌 |
| 3 |  | 安民歌 | 第十四　安民歌 |
| 4 |  | 讃耆婆郎歌 | 第十五　讃耆婆郎歌 |
| 5 |  | 處容歌 | 第十六　處容歌 |
| 6 |  | 薯童謠 | 第十七　薯童童謠 |
| 7 |  | 禱千手觀音歌 | 第十八　盲兒得眼歌 |
| 8 |  | 風謠 | 第十九　良志使錫 |
| 9 |  | 願往生歌 | 第二十　廣德巖莊 |
| 10 |  | 兜率歌 | 第二十一　月明師兜率（卛）歌 |
| 11 |  | 祭亡妹歌 | 第二十二　月明師爲亡妹營齋歌 |
| 12 |  | 彗星歌 | 第二十三　融天師彗星歌 |
| 13 |  | 怨歌 | 第二十四　信忠栢樹歌 |
| 14 |  | 遇賊歌 | 第二十五　永才遇賊 |
| 15 |  | 禮敬諸佛歌（普賢十願歌　其一） | 第一　禮敬諸佛歌 |
| 16 |  | 稱讃如來歌（普賢十願歌　其二） | 第二　稱讃如来歌 |
| 17 |  | 廣修供養歌（普賢十願歌　其三） | 第三　廣修供養歌 |
| 18 |  | 懺悔業障歌（普賢十願歌　其四） | 第四　懺悔業障歌 |
| 19 |  | 隨喜功徳歌（普賢十願歌　其五） | 第五　隨喜功徳歌 |
| 20 |  | 請轉法輪歌（普賢十願歌　其六） | 第六　請轉法輪歌 |
| 21 |  | 請佛住世歌（普賢十願歌　其七） | 第七　請佛住世歌 |
| 22 |  | 常随佛學歌（普賢十願歌　其八） | 第八　常随佛學歌 |
| 23 |  | 恒順衆生歌（普賢十願歌　其九） | 第九　恒順衆生歌 |
| 24 |  | 普皆廻向歌（普賢十願歌　其十） | 第十　普皆廻向歌 |
| 25 |  | 總結無盡歌（普賢十願歌　其十一） | 第十一　總結旡盡歌 |
| 26 |  | 悼二將歌 | － |

備考２．韻鏡字韻表

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 七音 | 声母 | 清濁 | 韻母 | 声調 | 等 | 翻字 | 内外転・開合 | 相配の平声韻 |
| 支 | 歯音 | 照母 | 全清 | 支韻 | 平声 | 3等 | tʃɪe | 内転4開 | － |
| 斯 | 歯音 | 心母 | 清 | 支韻 | 平声 | 4等 | sie | 内転4開 | － |
| 尸 | 歯音 | 心母 | 清 | 脂韻 | 平声 | 3等 | ʃɪi | 内転6開 | － |
| 次 | 歯音 | 清母 | 次清 | 至韻 | 去声 | 4等 | tshii | 内転6開 | 脂韻 |
| 自 | 歯音 | 従母 | 全濁 | 至韻 | 去声 | 4等 | dzii | 内転6開 | 脂韻 |
| 二 | 半歯音 | 日母 | 次濁 | 至韻 | 去声 | 3等 | řɪi | 内転6開 | 脂韻 |
| 之 | 歯音 | 照母 | 全清 | 之韻 | 平声 | 3等 | tʃɪei | 内転8開 | － |
| 思 | 歯音 | 心母 | 清 | 之韻 | 平声 | 4等 | siei | 内転8開 | － |
| 子 | 歯音 | 精母 | 全清 | 止韻 | 上声 | 4等 | tsiei | 内転8開 | 之韻 |
| 史 | 歯音 | 疏母 | 清 | 止韻 | 上声 | 2等 | șïei | 内転8開 | 之韻 |
| 耳 | 半歯音 | 日母 | 次濁 | 止韻 | 上声 | 3等 | řɪei | 内転8開 | 之韻 |
| 烏 | 喉音 | 影母 | 全清 | 模韻 | 平声 | 1等 | ʔo | 内転12開合の別無し | － |
| 宇 | 喉音 | 于母 | 次濁 | 麌韻 | 上声 | 3等 | ɥɪu | 内転12開合の別無し | 虞韻 |
| 快 | 牙音 | 渓母 | 次清 | 夬韻 | 去声 | 2等 | khuăi | 内転14合（寄入声） | 皆韻 |
| 叱 | 歯音 | 穿母 | 次清 | 質韻 | 入声 | 3等 | tʃhɪĕt | 外転17開 | 眞韻 |
| 察 | 歯音 | 初母 | 次清 | 黠韻 | 入声 | 2等 | țșhʌt | 外転23開 | 刪韻 |
| 高 | 牙音 | 見母 | 全清 | 豪韻 | 平声 | 1等 | kau | 外転25開合の別無し | － |
| 好 | 喉音 | 暁母 | 清 | 晧韻 | 上声 | 1等 | hau | 外転25開合の別無し | 豪韻 |
| 阿 | 喉音 | 影母 | 全清 | 歌韻 | 平声 | 1等 | ʔa | 内転27開 | － |
| 沙 | 歯音 | 疏母 | 清 | 麻韻 | 平声 | 2等 | șă | 外転29開 | － |
| 作 | 歯音 | 精母 | 全清 | 鐸韻 | 入声 | 1等 | tsak | 内転31開 | 唐韻 |
| 悪 | 喉音 | 影母 | 全清 | 鐸韻 | 入声 | 1等 | ʔak | 内転31開 | 唐韻 |
| 穰 | 半歯音 | 日母 | 次濁 | 陽韻 | 平声 | 3等 | řɪaŋ | 内転31開 | － |
| 尺 | 喉音 | 穿母 | 次清 | 昔韻 | 入声 | 3等 | tʃhɪĕk | 内転35開 | 淸韻 |
| 牟 | 唇音 | 明母 | 次濁 | 尤韻 | 平声 | 3等 | mɪəu | 内転37開合の別無し | － |
| 流 | 半舌音 | 来母 | 次濁 | 尤韻 | 平声 | 3等 | lɪəu | 内転37開合の別無し | － |
| 心 | 歯音 | 心母 | 清 | 侵韻 | 平声 | 4等 | siĕm | 内転38開合の別無し | － |
| 音 | 喉音 | 影母 | 全清 | 侵韻 | 平声 | 3等 | ʔɪĕm | 内転38開合の別無し | － |
| 任 | 半歯音 | 日母 | 次濁 | 侵韻 | 平声 | 3等 | řɪĕm | 内転38開合の別無し | － |
| 力 | 半舌音 | 来母 | 次濁 | 職韻 | 入声 | 3等 | lɪk | 内転42開 | 蒸韻 |

＊『音注韻鏡校本』（藤堂明保・小林博共著　木耳社　昭和46）より作表。

＊影母は ʔ、次清はhにおきかえました。他の翻字はすべて上書による。

【注】

1. 『三國遺事』（13世紀後半）に載せられている「新羅郷歌」14首と、『均如傳』（1075年）に載せられた「普賢十願歌」11首以外に、『平山申氏世譜』の中の「始祖壯節公行蹟」（1565年の記録）に収録された「悼二將歌」1首、合わせて26首である。原注22）」（金東昭　2003：38）。

2．郷歌には次のように多くの用例（橋本・兪　1973.9：11－2）がみられます。

　「哭屋尸・廻於尸・慕理尸・行乎尸・道尸・宿尸（以上、慕竹旨郎歌）/愛賜尸・狂尸恨・為賜尸知・愛尸・為尸知・為内尸（以上、安民歌）/乃乎尸（讃耆婆郎歌）/二尸・白屋尸・遣知支賜尸・用屋尸（以上、禱千手観音歌）/浮良落尸（祭亡妹歌）/東尸・見賜烏尸・来尸・道尸・掃尸（以上、彗星歌）/秋察尸・行尸（以上、怨歌）/還於尸・好尸（以上、遇賊歌）/喜好尸（隨喜功徳歌）・向屋賜尸⬛■尸也（■は門構えに西）・道尸（以上、請佛住世歌）/施好尸・好尸（以上、常随佛學歌）/為尸如（恒順衆生歌）/曰尸（普皆廻向歌）/盡尸・盡尸（以上、總結無盡歌）」

3．「　廣韵　切、集韵　切, 正韵　切,並音」（梁　1965:93）。「『三國遺事』巻3「彌勒仙花未尸郎眞慈師」の題目に‘‘未は弥と互いに音が近く、尸は力と形が似ている。「未與彌聲相近　尸與力形相類’’とある。（略）‘尸’（筆者注：歯音審母脂韻平声ʃɪi）が‘力’（筆者注：半舌音来母職韻入声lɪk）字と関係があるのかもしれない（略）」（金東昭　2003：101)との記述がみられ、また「‘尸’は‘乙’と同様に音節末の-rを表すのだが、その原音（上古音thier,中古音ʃɪi）とはかけ離れた表音機能を持っている点が疑わしい。（略）」（同書：44）との考えもみられます。

4．宋の「奉使高麗国信書状官」である孫穆が、十二世紀初頭（正確には一一〇三－一一〇四の両年間）に編纂した書である。本来は三巻で「土風、朝制、方言」（中略）。（改行）この「方言」には「天曰漢捺」のように、漢字で当時の韓国語単語または語句三百五十余項が記録されているが、（中略）大体において宋代の開封音で読んでさしつかえないことを示してくれる。（以下、省略）」（李基文　1975：104－5）。これを解読したものに「雞林類事麗言攷」（前間　昭和49：167-302）があります。

5．「中世韓国語の単語を‘天　哈嫩二　忝, 摘果　刮世大臥那刺　得刮’のような方法で収録している。最初の部分の（天, 摘果）は中国語であり、2番目の部分（哈嫩二, 刮世大臥那刺）は当時の韓国語‘하ᄂᆞᆯ,과실ᄠᅡ 오나라’を当時の中国音で表記したものであり,3番目の部分（忝, 得刮）は最初の部分の漢字‘天, 摘果’の韓国漢字音を表記したものである。」（金東昭　2003：115－6）。  
6．小倉氏は「叱」をㅅ（持格：属格）、また目的格（을・ᄋᆞᆯ・를・ᄅᆞᆯ）やㄹ（目的格の代用）などとみるだけでなく、日本語の促音のようなつまる音ともみられました（小倉　昭和49:243）。

7．梁氏は随喜功徳歌中の「嫉妬叱心音」の「叱」は「持格促音」（梁　1965：780）とされました。そしてこの「叱」には属格だけでなく語間字（持格促音字;同書：184）や献花歌の「花肹折叱可」（「花を折りて」）では末音添記と解釈されるなど、多様な用法をもつとみられました。

＊梁氏は「　訓讀「것」。　略音借「ㅅ」（一・二・2居叱）。「것」의末音添記。（中略）（改行）　　音借「가」。（以下、省略）」（上書：238）と解釈されています。

＊金完鎭氏は「것거」と転写（金完鎭　1980：68）されているので、kəs（「折」）+s（「叱」）+kə（「可」）のように「叱」を末音添記とみられたのでしょう。

＊小倉氏は「花肹折叱可」の「叱」を「ᄭᅥᆨ거兩字の間に起る促音現象を表はすに「叱」を用ひたのである。而して次なるはᄭᅥᆨ거の거を表記したものである。」（小倉　昭和49：162－3）と述べられています。これはᄭᅥᆨ（「折」）の末尾音-kから거（「可」）への初頭音k-への続きの音相が日本語の促音に似ているとみて、「折」と「可」の間に「叱」をみられたのでしょう。しかし小倉氏のこのような-k+「叱」+k-の考えを認めるとしても「叱」の実体はよくわかりません。

8．上古音に複声母Clを再構し、Cl→l/\*ɬ、そして\*ɬ→l/sのような変化が想定できるとする考え（橋本・兪　1973年9月：10の図）があります。上の論文ではその複声母Clのアイディアを参考にして梁氏が郷歌彗星歌の「東尸汀叱」の「尸」を「叱」（持格促音）とみられたことを紹介されています。しかし尾崎氏は「カールグレン流のgl-のような複聲母から今韻の來母が生まれたとする説明の困難さ、あるいは不可能（以下、省略）」（尾崎　昭和55：37）をみられています。そこでその説明の困難さを解消すべく中国語音韻学者が知恵をしぼった結果、今では「来母がr-で再構されるようになって、複声母再構の必要度は減少した。」（古屋　2010年11月：21）ようです。しかしそれでも「一等の「各」（中古見母）と「洛」（中古来母）のような例では、どうしても一方あるいは双方に複声母を考えざるをえない。」（同書：22）のが現状のようです。そこで上の困難さを解消できそうにない、上古音に複声母を再構するアイディアは尾崎氏が提起されているように破棄するのがよいでしょう。そして複声母のアイディアから「尸」と「叱」の関係を探るよりは郷歌そのものの考察から「尸」→「叱」の変化を導きだすべきでしょう。

9．『三国史記』（50巻）：「一一四五年に高麗の金富軾等によって書かれたもので、新羅、高句麗、百済の三国の歴史を紀伝体で記している」（藤本訳注（16）；李基文　1975：297）。

10．日本語の促音（以下の/Q/）については、「/Q/が有する共通の特徴は、[is□s’ɴ]（一寸）（以下2例省略）などの例からも明らかなように、声門閉鎖音[ʔ]の存在などではなく、むしろ先行子音を一モーラ分遅らせてから解放させる点にある」（城生　1977：119）という観察があります。そこで声門閉鎖音（ʔ）と促音（Q）の音相は似て非なるものとみられ、ʔ→Q（Q はtからの変化）のような直接的な変化は考えるべきではないでしょう。

＊HP（「日本語の起源」）の「ハ行音の変化について」の注41をみてください。  
<http://ichhan.sakura.ne.jp/paline/paline14.html＃41>  
＊宮良氏には琉球方言の声門閉鎖音と語頭促音・濃音についての観察がみられます（宮良　昭和57：76－193）。

11．「‘워ᇙ月ᅙᅵᆫ印쳔千가ᇰ江지之콕曲’」 （金東昭　2003：122）のように、また「（惡）－ʔak[ak]」(頭音)/「길（行路）－karʔ-kir[kalʔ-kil,kal-ʔkil] 」(中音）/「（八）－parʔ[pal]　朝鮮古字音（末音）」（3例すべて小倉　昭和50：232）のようにㆆ字が使用されています。

12．伊波　1974：27と小倉　昭和50：174に掲出されたカイモグラフ（波動曲線記録装置）をみると奄美喜界島方言の喉頭化音と濃音が同じ性質のものであることがわかります。

＊喜界島方言（『喜界島方言集』　岩倉市郎著　昭和16）の喉頭化音についてはHP（「日本語の起源」）の「特別編：「母音融合にたいする大野説を考える」」の注4をみてください。

http://ichhan.sakura.ne.jp/special/oono.html#4

13．中国語上古音には全清と全濁の区別があり、「唐代西北方音の特徴の一として,濁声母（有声語頭子音）が次第に弱化して淸声母と区別がないようになることが指摘されてい」（水谷　昭和42：108）ます。このような濁声母弱化の現象は日本語の呉音（例えば「」）が濁音で、漢音（例えば「」）が清音で現われる（藤堂　1980：277）ことに反映しているとみられています。また中国語北方方言（北京語など）話者にとって、日本語の濁音（有声音）を発音することは大変難しいことのようです。通説では上古の清声母と濁声母の対立を無声音と有声音の対立とみて、そこから中古の濁声母弱化は有声音が無声音に変化したことと説明されています。そしてこの考えを認めると、北方方言話者は中古以後有声音の発声方法を忘れたために、現在では有声音を発音できなくなったのではないかと考えられてきます。しかし濁声母弱化が日本の漢音にも起ったとする考えを信じれば、現在までのわずか1500年弱というわずかな時間のあいだに、その後裔である何億人という北方方言話者のことはどういうふうに考えればよいのでしょうか。そこで素朴な疑問が起こるのですが、中古以後の北方方言話者はそれまで知っていた有声音の発声方法を忘れてしまったために、有声音を発音することが困難になったのでしょうか。取るにたりない疑問とみられそうですが、このような素朴な疑問は大事にすべきでしょう。そこでこの疑問を解決するためのアイディアとして、北方方言話者は有声音の発声方法を忘れてしまったためではなく、もともと有声音の発声方法を知らなかったのではないかと考えます。そのために中国音韻学者が夢想だにしなかった濁声母（濁声）と濁音（有声音）との関係を切り離すことにします。つまり上古以来中古まで北方方言に濁声は存在したが、濁音（有声音）は存在しなかったと考えるのです。そのため古代の北方方言話者は有声音を知らず、中世以後濁声は清声に弱化したために現在の北方方言話者は誰一人として有声音を簡単に発音できないとみれば上の疑問は氷解するでしょう。

では上古音の清声母と濁声母の対立が無声音（清音）と有声音（濁音）の対立ではないという、とても信じることができそうもないこのアイディアを認めれば、古代の清声母と濁声母の対立はどのように考えればよいのでしょうか。古代の濁声母とは何かというこの難しい問題はのちの更新で詳しく考えます。  
14．「憂音・阿冬音・就音・夜音,熱音,：雲音,誓音,岳音・所音,吾音,執音,餘音,人音,沙音・菓音,沙音,于音・餘音」

＊ただし、先に考察した「心音」「掌音」、また「理音如」/「所音物生/恨音」/「悩叱古音」/「伊音叱如支」/「伊音叱多」はのぞく。

＊「私音・逢音（ともに明律）/受音・侤音（ともに世宗元年漢城城壁石刻）/題音・舎音・長音・汗音・次音（ともに典律通補）/儈音（吏讀便覧）」（ハングル・例は省略;梁　1965：101）。

＊「舎音　말ᄋᆞᆷ（田莊の名主の義）」や「奈老（날）に捺音又奈　音　（날ᄋᆞᆷ）、于老書記の　宇流汗禮　　（울）に于老音（울음）、（以下、略）」（すべて前間　昭和49：198）。

15．「流・好」の中古音はそれぞれlɪəu/hau。東国正韻では「流ryuw、好how」。また朝鮮漢字俗音は「流riuL　好hoR/H」（伊藤　平成19：本文篇166,159）/「流ryu　好ho」（河野　昭和40:三五）。

16．多和田氏は「我是日本国的人　wan・’ja・ma・to・phi・chjʋ」（多和田　1982：245）のように翻字されていますが、このwanは翻字であって発音ではないのでしょうか。もしこのwanが発音ではなく翻字であれば、当時のwanの発音はどのようなものであったと多和田氏は考えておられるのでしょうか。

17．この後の長い長い考察の道筋を簡単に紹介しておきます。日本語「梅」の変化（「」→「」（本草和名）/「んめ」（土左日記）→mme/ume（現代方言））を考察することで、中世の「ムメ」の「ム」はmではなく、mもどきのMjと想定できます。すると中世の「ムメ」（Mjme）は現在「ウメ」（mme/ume）に変化しているので、このMjの変化に対してMj→m/Mj→ŋ（→u）を想定できるでしょう。ところで首里方言の「我」の変化（「語音翻譯」のᄝᅶᆫ（Mkoan）→’oan：ㅱをMkと翻字）からMk→’の変化が想定できます。そしてこのMkoaは’ua（→wa）もどきの音とみられるので、Mkoはまたuもどきの音とみることができます。そこで郷歌の「心音」はmʌzʌM→ma’ɨmのように変化しているので、「心音」の末音添記「音」の末音M（このMをMkと改め）の後裔を「語音翻譯」のㅱ（Mk）とみると、Mkの変化はMk→mとMk→ŋ（→u）（後者は中古音の軽唇音微母の変化）の二つの変化が想定できるでしょう。そこで日本語の中世のMjと「心音」の末音Mkを同じものとみることができるでしょう。

さて鼻音はm（両唇鼻音）→n（歯茎鼻音）→ŋ（軟口蓋鼻音）のような変化が自然ですが、それに反してM→m/ŋのような特殊な変化が古代中国の「『詩経』における侵：蒸中東（陰類・入類では緝：之幽侯）,及びこれと同類の関係に立つ談：陽（陰類・入類では葉：魚）の押韻」（藤堂　昭和62：28）にみられます。この侵（談）：蒸中東（陽）の通韻は「蒸中東が-ŋ型でなくして、-m型であったため, 侵部と押韻したのであり,それは江永の論じたとおり周畿以西秦蜀にかけて現れ」（ともに同書：27）ました。そこで侵（談）韻の語末を鼻音mではなくmもどきのMcと考え、Mcをmŋʔ（以下、ここでは声門閉鎖音/ʔ/は考察せずに）と想定します。すると（mn→）mŋ（＝Mc）→mɴ（ɴ：口蓋垂鼻音/ɴ/）→mの変化と、（mn→）mŋ（＝Mc）→ɯŋの変化をあわせてMc→m/ŋ の変化を考えることで、古代の侵（談）：蒸中東（陽）の通韻を説明できるでしょう。そしてこのMcの変化はMj/Mkの変化と同じものとみて、その後はmən→mnの変化を仮定し、オーストロネシア語族の接中辞in/-umに対してmn→in→i（中国語の開口介音-i-）、またmn→mŋ→u（合口介音-u-）の変化を考えることで上古中国語の介音が解釈できることをみます。その後オーストロネシア語族の接頭辞mən（接中辞-in/-um）、あるいはオーストロアジア語族の複合接中辞-mn-（土田　平成2：98）との関係（同源）考えていくことになります。

【引用書】　＊中国・韓国の人名は日本語読み。

伊藤智ゆき　平成19　『朝鮮漢字音研究　本文篇』　汲古書院

伊波普猷　1974（2刷：1993）「海東諸国紀附載の古琉球語の研究―語音翻訳釈義―」/「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」『伊波普猷全集　第四巻』　平凡社

岩倉市郎　昭和16　『喜界島方言集』（全国方言集一）　柳田國男編　中央公論社

牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　昭和42　『中国文化叢書　１　言語』　大修館書店  
小倉進平　昭和16年 8月「「朝鮮館譯語」語釋（上）」『東洋學報』（28巻3号）　東洋協會學術調査部

小倉進平　昭和16年 12月「「朝鮮館譯語」語釋（下）」『東洋學報』（28巻4号）　東洋協會學術調査部

小倉進平　昭和49　『小倉進平博士著作集（一）郷歌及び吏讀の研究』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學会　＊「 京城帝國大學法文學部　紀要第１」（京城帝國大學　昭和4年刊)の複製

小倉進平　昭和50　『小倉進平博士著作集（三）国語及朝鮮語發音概説　南部朝鮮の方言他』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學会

尾崎雄二郎　昭和55　『中國語音韻史の研究』（東洋学叢書）　創文社

亀井ほか　1989　『言語学大辞典　第2巻　世界言語編　（中）さ〜に）』　亀井孝・河野六郎・千野栄一編　三省堂

姜信沆　1993　『ハングルの成立と歴史　訓民正音はどう創られたか』（日本語版協力：梅田博之）　大修館書店

京都大學國語學國文學研究室編　昭和33　『倭語類解』　京都大學國文學會

京都大學國語學國文學研究室編　昭和40　『弘治五年朝鮮板　伊路波』　京都大學國文學會

京都大學國語學國文學研究室編　昭和47　『三本對照　捷解新語　本文篇』　京都大學國文學會

京都大學國語學國文學研究室編　昭和48　『三本對照　捷解新語　釋文・索引・解題篇』　京都大學國文學會

金完鎭　1980　『鄕歌解讀法研究』（韓國文化研究叢書　第21輯）韓国文化研究所編　서울大學校出版部発行

金思燁　昭和56（改訂増補版）『古代朝鮮語と日本語』六興出版

金東昭　2003　『韓国語変遷史』　栗田英二訳　明石書店

河野六郎　「「伊路波」の諺文標記に就いて―朝鮮語史の立場から―」『弘治五年朝鮮板　伊路波』　昭和40　京都大學國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

国立国語研究所編　昭和51　『沖繩語辞典』（国立国語研究所資料集5）大蔵省印刷局発行

城生佰太郎　1977（1992　3刷）　「4　現代日本語の音韻」『岩波講座　日本語　5　音韻』岩波書店

多和田真一郎　1982　「語音翻訳索引及び琉球館訳語用字一覧」『琉球の言語と文化　仲宗根政善先生古稀記念』　仲宗根政善先生古稀記念編　論集刊行委員会発行

趙義成訳注　2010　『訓民正音』（東洋文庫800）　平凡社

土田滋　平成2　「言語の系統関係とは何か」『日本語の形成』　崎山理編　三省堂

天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55（改訂版）　『現代朝鮮語辞典　改訂』　養徳社

東條操編　昭和44　『南東方言資料』　刀江書院

藤堂明保　昭和42　「1　上古漢語の音韻」『中国文化叢書　１　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

藤堂明保　1980　『中国語音韻論－その歴史的研究－』　光生館　＊江南書院版（昭和32年刊）の改版

藤堂明保・小林博共著　昭和46　『音注韻鏡校本』　木耳社

橋本萬太郎・兪昌均→Hashimoto,Mantaro J.and Yu,Chang-Kyun 1973.9

服部四郎　1951　『音聲学』（岩波全書131）　岩波書店

濱田敦　昭和45　『朝鮮資料による日本語研究』　岩波書店

平山久雄　昭和42　「３　中古漢語の音韻」　『中国文化叢書　１　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

[福井玲　2013　『韓国語音韻史の探究』　三省堂](javascript:open_window(%22https://ndlopac.ndl.go.jp/F/TBF9EUF92JKPXGSMVXB49RP1RUDTAN2NF4N2V36BEN1S1TA9C2-16901?func=service&doc_number=002078035&line_number=0042&service_type=TAG%22);)　＊한국어 음운사 탐구　Explorations in Korean Historical Phonology

古屋昭弘　2010年11月　「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」『中国語学』（第257号抜刷）日本中国語学会

前間恭作　昭和49　『前間恭作著作集　下巻　龍歌故語箋　雞林類事麗言攷他九篇』　京都大學國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

水谷真成　昭和42（7版　平成3）「2．上中古の間における音韻史上の諸問題」『中国文化叢書　１　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

宮良當壯　昭和57　『宮良當壯全集　9』 第一書房　＊「琉球諸島言語の国語学的研究」「琉球語と国語との比較研究―特に音韻に就いて―」ほか

李基文　1975　『韓国語の歴史』　藤本幸夫訳　大修館書店

李鍾徹　1991　『万葉と郷歌　日韓上代歌謡表記法の比較研究』　藤井茂利訳　東方書店

梁柱東　1965　『増訂古歌研究』　一潮閣

Hashimoto,Mantaro J.and Yu,Chang-Kyun（橋本萬太郎・兪昌均）　1973.9　Archaism in the Hyang-Tshal Transcription The sound values of the character 尸　and their origin

『Journar of Asian and African Studies』(No.6)　 Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa（『アジア・アフリカ言語文化研究』（6号）　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）